

# 欠陥勇者（タイトル未定）

高橋くるる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元暴走族で格闘技経験者のサラリーマンが異世界転生。

あらすじは、まあ完結したら書きます。

どこまでがあらすじかが区別できないので、申し訳ございません。

7 6 5 4 3 2 1

目

次

108 76 65 41 30 23 1

「んく、ふあ～あ。ああー、痛て。」

まだまだ眠い状態だが尿意を催し目が覚めた。

どうやら身体を丸めて寝ていた為に肩が凝っているようで、首が若干痛いのは仕方ないだろう。

どうしてこうも肩が凝りやすいのか。

日本人の7割は肩こり持ちというが、その7割に入りたくなかつたと本気で思う。

しかし、自分の口に出た言葉に答える者は誰もいない。

何故いなか。それは他の奴らはまだ寝ているのだろう。

起きていたら「おはよう。」という挨拶が返つてもおかしくない。

奴らというのは若い頃から付き合いのある友人たちだ。

ぼやけた意識のまま上半身だけを起こした状態で、頭を搔きながら周囲を見渡した。

頭を搔くのは癖で、これと言つて特に意味はない。

「ここはどこだ？」

目覚めてすぐの場合、意識だけじゃなく視力はぼやけて見えてしまうときがあるが、言葉の意味的に完全にボケてなどいない。ボケていたらそもそも働いてすらいないだろう。

それに勿論ぼやけて見えている風景でもないようだ。

今現在、どう見ても目の前に広がる景色は家ではない事だけは確かな状況に居るのが目に映る情報から理解できた。

「はっ。夢の中で夢でも見てんのか？」

鼻で笑うようにして流そうと考えたが、手に伝わる感触や、思い通りに動く手足に対して徐々に夢じやない事を理解する。

改めて周囲を見渡すが目に映る物は日差しを浴びた緑の濃淡がある立ち並ぶ木々ばかり。

「よし、少し整理しようか。」

誰も聞いていないのはわかっているが、ゆっくりと先日の記憶を紐

解くように思い出す。

あくまで独り言だと言うのは理解している。

「確か昨日は……」

物販関係に勤めている自分は、商品を満載した中国からのコンテナの納入を終え、一通りの手続きを終えた後に同僚へと仕事を引き継いだ。

いつもよりたまにはという理由で仕事を切り上げ、同じく仕事を切り上げてきた友達3人と夜の街へと飲みに繰り出したはずだった。まずここまでシラフだったでの問題ない。

そこから上司がどうだとか、部下がどうだ。お得意先が厳しい条件を突き付けるだの、仕事の愚痴から始まり、彼女や子供が出来てどうなつただのと現状報告。

いわゆる他愛もないアラサー・ボーテークだ。

毎回テンションは社会人特有の最底辺からスタートするいつもの日常だった。

そのまま酔いがまわり、何件か梯子をしてテンションもいつのまにか上昇、既に最初の暗いムードなど吹き飛びドンチャン騒ぎをしていた記憶がある。

なんだかんだ言つてもお酒は強い方だ。記憶は普通に残っている。夜の街ですれ違う可愛いお姉ちゃんには裕也が絡み、飲みすぎた元哉はゴミ捨て場でこんにちわをしていたはずだ。

家に帰ると嫁さんに説教を受ける和樹は、そのまま帰りたくないという感じで俺の家で潰れるまで飲もうという提案を行つた。

そこで了承した俺は自分の家へとタクシーに乗り込み皆で宅飲みへと突入したのだ。

元哉だけは早々に家のトイレにぶち込んで放置しておいたが、和樹と裕也とは会話も弾んだせいか、ひたすら飲み続けて動画サイトの閲覧などで盛り上がった。

飲み続けて気付けば明るくなりかけた頃に、三人とも眠くなつて寝たはずだ。

「うん。ここまで問題ない。じゃあ、ここはどこだ?」

もう一度周囲を見渡すが、覚えが無い景色が視界に入る。

トイレに行こうにも家でない為、勿論存在トイレなど存在しない。家中はジャングルではないし、勿論観葉植物など育てていない。むしろ雑多に散らかした自身特有のどうしようもない1DKの部屋だ。

日差しも悪く、風通しも悪い。タバコの吸いすぎで家の中はどうとかというと臭い。

それが今居る場所、天井は開放的。

雨が降れば雨漏りなんか目じやないくらいのズブ濡れコースがお約束された場所。

天井など一切無く、日差しは多少悪いが風通しも抜群。

こちらも勿論風を防ぐようなものなど一切無く同じく開放的。

台風など来ようものなら綺麗に横から風になぎ倒される爽快感を味わえるだろう。

その上トイレは360度どこでもどうぞと言える素敵な環境だ。

タバコを吸うにしても火の始末さえきちんと行えば臭いなど気にする必要もないだろう。

ではぶつちやけどこか？

そう、答えは森の中。

友達に電話をできるなら第一声は、こうだろう。

「もしもし？・私メリーチャン。今森の中にいるの。」

うん。間違いない忙しいと言つて電話を切られる事請け合いだ。

しかし真面目な話、近所にこのような森は無いし空気はこのように綺麗ではない。

どちらかと言えば一日中路面に近付けば近づく程チリや埃が舞つている都心部だった。

それが今居る環境は真逆の環境で、優しく頬を撫てる風がとても心地いい。

「んく、気持ち良い風だく……つて、やつぱりわからねえ。」

背筋を伸ばして自然つていいなど一瞬思つたが、すぐに現実に引き戻され痛くもない頭を抱え込んでコメカミを押さえながら嘆く。必

死に考えても心当たりが無いのだ。

「俺は夢遊病者だつたのか？いや、ないだろ。それともあいつらが？」

どう考えてもこんな場所に来た記憶が自分の中に存在しない。

仮に来たとしても一人で来たのはありえないだろう。

昨日は他に3人も居たのだ。それが360度森の中。

どこまでも続きそうな深い木々や茂みに不安を覚えながらも楽観的に捉えようと理由を探した。

それに眞面目な話、寝た後にあいつらがイタズラで連れて来た可能性も考慮できる。

何故なら、動画サイトで外国人の若い男の子達が寝ている友達をワークベッドへと移して、湖に放流している動画を見て全員で笑つていたからだ。

もしかしたらそれの真似事かもしけれない。

その為見慣れない場所だが少しだけ待つことにした。

★・ ★

あれから2時間程だろうか。

あくまでだろうかというのは感覚だ。

一応近くを歩き回つて探しながら待つてみたが、誰もやつてこない。

それなりにふざけてみたりもしたが、空しく風に揺らされる自然の音しか返つて来ず、芸人で言うならダダ滑り状態の時にSEだけが流れただよう状況だった。

それに近くを歩き回つてみても、大きく移動しないのにも理由がある。

実際はイタズラだつたのに移動しすぎて本当の迷子になつてしまふと、あいつらにとつて予想外になつてしまふだろう。

するとどうなるか。

本当の迷子になり、捜索願などが出たら陸上自衛隊や自警団、警察や獵友会などが出動してイタズラで済まなくなる。

大の大人が4人でふざけてリアル迷子などのニュースが流れようものなら、周囲の関係者の方々へと謝罪脚光をする羽目にもなる。そ

れだけは避けるべき事案だ。

あくまで想定内と想定外では、悪戯と事件というぐらいには違うのだ。

ただ、途中いい加減飽きてきたので連絡するためにはスマホを取り出そうとしたが、生憎とスマホは持っていないようだった。多分家に置いているのだろう。その為時間が正確に把握できない状況だ。

それと、一つだけ気になる事がある。今身に着けて居る衣服だ。スマホを取り出そうと服を弄つたが、身に着けて居る衣服が高校生の頃に着用していた服に似ているのだ。

同じかと言われば素直にわからないと答えるだろう。

あくまで、当時に似ていてる服を持っていたとだけはわかる。

何故なら10数年前の記憶など曖昧だからだ。

当時流行していたのはお兄系だろう。

近年ならばネオお兄系、ネオビジュアル系、ネオホスト系だった。何が違うんだとツッコミが入りそうだが、ぶっちゃけ使っている金額が高かつたのがお兄系、安いのがネオお兄系。

身に着けて居るブランドがハイブランドか安物ブランド。マイクが多少違うだけでしかないと思つてている。

ニートとネオニートもあるが、それはまた別のジャンルだ。

金銭を食いつぶしていく殻潰しがニート、定職に就かずに親より稼ぐ無職というのがネオニート。違いはあるがまあ関係ない。

機能性を重視した部屋着ならば物持ちが良いと言えるだろうが、当時のタイトな服装でオシャレが好きな自分からすると、10数年前の流行服など部屋着でもなければ実用性など皆無でダサいの一言に尽きる。

「一体誰がこんな服を着せたんだ？俺はこんな物を持つてない。

こんなイタズラをするのは和樹か？」

この場に居ない友人の中で、このような悪戯を行いそうな人物を思い描きながら一人の名を呟く。

「お~い！いい加減にしろよー！さつさと帰るぞー！裕也ー、和樹ー、元哉ー。」

相変わらず返事が無い。

まあ急ぐ予定もないし陽もまだ高い為、しばらくは付き合つても問題ないと考え木を背にとりあえずその場で座り込む。

「仕方がない。もう少し待つか。」

★★

あれからどれくらい経過したのだろうか。

周囲も徐々に暗くなり、段々と笑えなくなつてきてている。

もしかしてあいつらの方が迷子になつてているのかと考えたが、あいつらは3人だ。

それにスマホなり車なりを持っている。

その状態で迷子になるのはありえないだろう。

「おいコラ！・テメエらあんま調子乗つてんじやねえぞ！・さつさと出てこい！」

徐々に我慢の限界を迎えてつあつた為に声を荒げたが、それでも周囲から返事は無い。

起きた時は鳥の巣りだったものが、現在は獸の鳴き声が混ざるようになつてている。

それ以外には聞こえてくるのは木々の風に揺れる葉音と、小さな水の流れる音だけだ。

「流石にこのままじゃ危険だな。移動するか？でも……」

移動するにしても道という道が存在しないし、朝食も昼食も摂つていらない。

ましてや水分すら摂れていない。

移動するならば勿論早目の方がいいだろう。

ただ、夜になれば知識がない人間でもわかる。

街灯があれば別だが、光の無い闇の中を手探り状態で歩く行為は危険だ。

もし崖や傾斜のきつい場所で足を踏み外して怪我をしたら笑えないだろう。

それに実際に子供の頃、修学旅行の肝試しで道に迷つて崖から転落

しかけた事実があるからだ。そんな考え方から思い悩む。

それに人の痕跡と言う痕跡がこの時間まで一切無かつた。ならば今からの移動は避けるべきだと判断する。

むしろ探すならば最低限の寝床だろう。

「しゃあねえな。一日どこかで過ごす方が無難か。」

明日は仕事だが仕方ないと自分に言い聞かせるようにして、安全に過ごせそうな場所を探す。

上司から怒られたとしても、仕方ない部分は仕方ない。

その分は仕事をきちんと行い結果を出して仕上げてしまえばいいだけだ。

そこらへんは理解している。

社会人である以上謝れば済むなどという甘い考えは持っていない。社会人であるならばケジメは自分で取るべきだ。

その上で何が原因で何をして改善するかを始末書で書いておけばいい。

正直始末書的にはこうだろう。

お酒を飲みました。起きたら森でした。そして遭難しました。ごめんなさい。次から気付けます。

ただ、こんなふざけた内容を書いてしまえば社長にぶん殴られてしまう。

大人と言うのは簡単な物を難しくするのが仕事だ。

それらしいビジネス文言を使用して、堅苦しいものを作り上げるのだ。

それでお金をもらう。

うん。まあ関係ないけどな。

それからすぐに壁を繰り抜いたような洞窟を見つけたのは幸いだつた。

洞窟は奥深くまで続いているようだったが、一日過ごすだけなので深入りせずに入り口に腰を据える事に決めた。

これでもし雨が降つても問題ないだろう。

「本当に一体ここはどこなんだ？」というよりこれ洞窟より鍾乳洞に近

いんじやねえか?」

ぶつくさと咳きながら洞窟の壁にもたれかかる。

ここがどこかという答えが出ない問題を自身に問いかけ、無為に時間を過ごすしかなかつた。

「明日はとりあえず水の確保をしてから移動か。いずれにしても何も口にしていないのはきつい。」

空腹と渴きを誤魔化す為に、その日は早めの床についた。

★★

翌日

ハツキリ言つて碌に睡眠がとれなかつた。

文明社会で生きて来た自分にとつて、完全な闇の中で身を守る物もない。

非日常的な体験は友人たちと一緒に居れば心配などしなくても大丈夫だろうが、今は一人という状況であつて、時折草木が揺れる音により警戒のため意識が何度も戻されたからだ。

地べたに直接横になつていたのも原因で身体のあちこちが痛い。ゆつくり風呂でも入つてマッサージでも受けたい気持ちだ。

そんな身体に鞭を打ちながら立ち上がる。移動を開始するためにだ。

今の中に動き出しておかないと、また陽が暮れて同じ状況になる。そうなれば食べ物すら碌に取れていない今は危険な上、もう一泊するなどこちらとしても願い下げだ。それに仕事もある。遊んでいる暇は休みでない限りは無いのだ。

それに今は行動できたとしても、やがて動けなくなり移動すらできなくなるだろう。

子供時代は迷子で済むだろうが大人になれば迷子ではない。遭難が適切だ。そして現在はリアル遭難真っ最中。

自分でもわかるくらい切羽詰まつている状況だとは理解できている。

陽が昇り始めたのか、徐々に周囲が明るくなつてきた。

陽が昇り始めたのか、徐々に周囲が明るくなつてきた。

明るくなつてきている事によつて精神的に安心感が徐々に戻つてくる。

鳥目という事ではないが、目が効くというのはそれだけで情報が入る。それが安心感へと繋がるのだ。

「まずは水。それからどうするか。」

第一目的として、先日から聞こえている水の音がする方へと向かうのが先だろう。

手持ちに水筒のような物が無い為に確保とまでは行かないが、知っているというだけでも万が一を考えると保険になる。

まあ、近くにあるというのならせめて顔だけでも洗いたいのもあるが。

ベッドに倒れ込みたくなるような重い体を引きずりつつ足を水の音がする方へと運んだ。

音を頼りに茂みをかき分け、しばらく歩くと沢のような開けた場所へと出た。

流れている水は流石に森という感じだけあつてか、透明度も高く清流という感じがする綺麗なものだ。

「これ……飲めるのか？」

いくら綺麗な水といつても、顕微鏡で見れば微生物満載であろう水に対して一抹の不安が頭によぎるが、水を見た事によつて顔を洗うよりも先に先日から何も口にしていない状況。

頭の中で脱水症状と微生物。天秤にかけるが、現状として選べる状況ではない。選ぶなら後者しかないだろう。

そんな事もあつて、膝をついて両手で水を軽く掬いながら途中で考えるのをやめる。

冷たい水でまずは顔を流し、いくらか眠気が飛んでスッキリしたのは幸いだ。

気を引き締めなおすには丁度いい。

そのまま口へと両手を使つて水をゆっくり運ぶ。

一日ぶりに何かを口に入れたため、別に歯周病でも何もないが、少し歯が染みる。

「ここで歯ブラシがあれば嬉しいけどな。」

沢の水で濡れている両手を服で拭いながら愚痴を言うくらいの余裕はあつた。

ただ、無い物を切望するが、無い物は無い。仕方ないと諦めるしかない。

水分を摂取した事によつていくらかマシになつた身体。

人が居る場所へ移動しようとして立ち上がるようになると、対岸の水流で茂みが揺れたのが視界の端に入る。それが気になり自然と続けて顔を向けた。

「おい！誰かいるのか？居るなら助けてくれ。ここがどこかわからず迷子なんだ。」

しかし、その声に反応は無い。

しばらく茂みは左右に揺れ続け、やがて茶色の鼻先らしきものが茂みからぬつと現れた。

「おい……あれはなんだよ。」

茂みをかき分けるように出てきたそれを見て声が出る。

勿論、誰も答えなど返してはくれないのはわかっているが、自分の目を疑つたのもあつた。

出てきたそれは立派な牙を持つたイノシシのような外見をしている生物だ。

イノシシの場合牙を持つていない場合は雄であるが、親戚なら雄だろう。

ただし、イノシシかと聞かれればノーと答えれる生物だ。

イノシシに似ている生物だが、イノシシではない。

長い脚を4本持つていて、言つてみれば牛のような脚を持つた生物である。

生きて来た中でこのような動物をネットやTV、学校で習つた記憶もない。

ただ、どこの国になら存在していたとしても、日本で存在しているなど見知った知識にはなかつたのだ。

その生物はこちらに気付いたのか足を止め、鼻息荒く視線がぶつ

かつた。

誰もが感じた事があるような時が止まるような感覚。

これが女の子となら運命の出会い的な冗談で声を掛ける事もできただろうが、むしろどっちかというと、嵐の前の静けさ。緊張の一瞬。試合の前の瞑想に近い。

動物と対峙した時に感じる目を放したら負けだという状況に対しても、お互いに目を離さない。

「ブオオオオ!!」

「うるさつ！」

何を思つたのか、イノシシに似た動物は急に鳴き声を上げる。

その声量は鳴き声というよりは雄叫びだ。

あまりの大きさの鳴き声に対し、耐え切れず屈むようにして耳を塞ぐ。

しまつた！目を！

つかこの状況つて非常にやばいんじやなかろうか。

どうする？逃げるか？でもどこに？

目まぐるしく頭の中でどうするか考えが飛び交う。

自身の直感が危険だと告げているのだ。

パキッ——

周囲に響く乾いた音。非常に嫌な予感がしたが、その考えは正解だった。

ゆつくりと音の聞こえた方向へと視線を動かす。

音の正体は下がった事による動作で、小枝を踏みつけた際に折れて出了音だつたようだ。

ここで初めて無意識に一步下がつてしまつた事に気付いた。

音が合図となつたのか、イノシシ（仮）がスタンバつてましたとばかりに勢いよくこちらに向かつて駆けてくる。

「クソー・なんでこうなんだよ！」

愚痴を吐き捨て180度身体の向きを変え、全速力でその場から逃走を図る。

こうなつてしまえば、どうこうするの考えよりは条件反射に近い状

態での行動だ。

目の前には木々や茂みによつて行く手を遮られるが、そんなものは関係ない。無理やり切り開いてひた走る。

足元は見えず、石に躡き木の根に躡くが、それでも走り続ける。すぐに服は草の汁でドロドロになり、枝で破れ、まともな恰好とは程遠い状態になつていぐが、気にしている余裕は既に失っていた。走りながら時折振り返ると、間違なくこちらを目標にして追いかけて来ているのが理解できる。

どうする？どうする？

無理！追い付かれる！やる？どうやつて？

既に頭はテンパつっている状態でまともな思考など思い浮かばない。例え冷静としても、普段タバコを吸つて酒を飲み、碌に運動などしていない肉体はすぐにバテるだろう。というより既に息が上がりつつある。

迫る危険に長く考えていられない。

タイムリミットは有限で、半ば強制的に決断を迫られた状況に走りながらも歯噛みする。

「仕方ねえ！」

考えるのをやめ、イノシシ（仮）へと向き直り対峙する。

自分が走つて出来た獣道のようなものを4本の足で器用に駆ける姿。

そんなアウエーというハンデキヤップに対し『卑怯だぞ』と言いたくなるが、伝える言葉はそれじやない。

「来いコラア！」

イノシシ（仮）を煽るようにして右手で挑発する。

人間が決めたルールの中で自然が卑怯かどうかなど関係ない。むしろ自然がルールなのだ。

ならば自然に従うのが道理だろう。

「ブオオオオ!!」

「なんつってな。」

確実にこちらを狙つて追いかけているイノシシ（仮）のタイミング

を見て、ギリギリの所で右へと跳んだ。

卑怯とは言わないし言わせない。

テメエが森の地の利を使うなら俺は人間の知恵を使う。

自然が道理なら別に戦わなくても逃げればいいのだ。

不利有利で言えば今の自分は圧倒的不利。

それならばこれも立派な戦術の一つなのだ。

「どうだ！ マタドー——」

マタドール並に決まつたぜ！と言おうとしたのも束の間。

予想外の事が発生した。茂みに隠れて斜面となっていたようで、脚の踏み場がなく上手く着地できずに、そのまま転がり落ちたのだ。

「ぬおつ！ がつ！ ざつ！」

両手で頭を防ぎながら顔を肘で防ぐが、体中をぶつけているのだろう。

考える余裕も無く衝撃となつて身体を痛めつける。

やがて回転は止まり、止まつた事によつてゆつくりと周囲を気にするよう恐る恐る目を開ける。

「ぐつ……つ痛み……あんの豚あ……ぶつ飛ばしてやろうか。」

痛みの場所に目を向けたところ、いたるところに身体は傷がある。流血している場所は手、脇腹、大腿と大きなところはすぐにわかつたが、幸いどこにも骨折がないようだ。

確認しつつ文句を吐きながら痛みに耐え立ち上がった。

再度周囲を見渡すと、また沢とは別の多少開けた場所に出たようだ。

落ち葉で一面埋まっているが、それでも動きやすさで言えば周囲が見渡せる分マシだろう。

「ブオオオオ!!」

その雄叫びと共に目の前にイノシシ（仮）が空から勢いよく降つて来た。

親方！ 空からイノシシが！

そんなギャク的なものが頭に流れたが、流石にすぐに現実へと引き戻された。

「すんません！…さっきのは嘘です！…って言つてもその様子じゃ許してくれませんよねー。」

「ブオオオオ！」

調子よく両手を合わせながら謝るが言葉は勿論通じていない様子で、牛が突進するように牙を剥けて前脚で地面を叩いている。

その姿は冗談に対して怒つたような素振りを見せたような感じだ。

ただ、やる気満々のイノシシ（仮）に対して、いい加減我慢の限界に達する。

「あー。もう考えるのもいいか。しつこい男は嫌われるつて教えてもらわなかつたのかよ！…ぶち殺すぞ豚あ！」

そのイノシシ（仮）に悪態を付きながら先程までとは真逆の言葉をぶつける。

やる気になつている相手に対してもちらもやる気になる。当たり前の状況だ。

人間誰しも限界はあるのだ。

「おい豚！俺をそゝらの人間と一緒にしてんじやねえぞ。

これでも元黒龍会特攻隊長だ。テメエがやる気ならとことんやってやる。

人間様に盾突いた事を後悔して死ね！」

「ブオオオオ！」

イノシシ（仮）はそれがどうしたと言わんばかりに再度雄叫びを上げながら今にも射殺そうと牙を上下しながら突進してくる。

失敗できない状況に陥っている中、その突進にタイミングを合わせるために、小さなズレも発生させないように凝視し、リズムを取る。タタタツタタタツタタタツタタタツ

こいつの走り方。まるで馬だな。

意外と余裕がある自分に驚きながらも構える。

「こーだあ！」

タイミングは完璧だった。左手を使つて牙を掴む。

流石に大きい動物だけあつて想定以上の突進力があり、掴んだ事によつて後ろへと押されるが、それでも日本男児。根性、気合い、精神

論の昭和の力を舐めてもらつちや困る。

同じ人間に負けた事は認めても、頭の悪そうな豚程度に負けるつもりはない。

その突進の力に対して、地面を滑るように散らして無効化させる。「ブツッ?」

「どうだ豚? 人間やればできるんだ! こつからは俺の番だ!」

「ブオオオオ!!」

「死ね豚あああ!!」

驚いたような声を上げた豚。

必至に振りほどこうとするの牙を力で抑え込み、その眼に向かつて上から叩き込むように力を込めた右拳を放つ。

「ブオオオオ!!」

「まだまだあ!!」

体力が続く限り右手の拳を握り込み、顔面へと連打する。

もう少し力があれば全体を抑え込んでヘッドロックでもかけようがあるが、いかんせん豚と言つても力が強い。

気を抜けば逆に自分が転倒して牙で突かれる可能性もあるだろう。それを考えたからこそ今の状況がでの最適なパンチという拳をひたすら叩き込む。

重く鈍い音を響かせ、まるでサンドバッグを殴り続けているような感覚だ。

拳が軋み、痛みが走り、力が込められているのかすら途中からは不明。

ただ、これはルールの無い命のやりとりだと判断できる。

それならば中途半端な事は逆に自らを危険に招く余計な行為だ。加減などしない。

なぜこんな場所にいるかは今の自分にはわからない。

こいつだって俺がいなければこんなことをする必要が無かつたはずだ。

でも、出会つてこうなつてしまつた以上、やるなら徹底的にやる。今この場では思いつく限りこれしか方法はなかつた。

「悪いな。別にテメエに恨みは無い。」

徐々にイノシシ（仮）の鳴き声は弱くなり、やがて痙攣を起こしあげる。

「おらあ!!」

何発殴つただろうか。既に腰に力も入っていない、膂力も入っていない。

そんな体重だけを預けるように乗せた最後の拳を叩き込んだ。

その打撃を最後にイノシシ（仮）は力なく崩れ落ちた。

ピロリロリン

「はあ……はあ……っ！」

右手の感覚が痺れている。見てわかるぐらい拳が腫れているのだ。腫れているという事は折れている可能性もある。

今はまだアドレナリンが出ているから痺れで済んでいるが、このアドレナリンが引いた事を考えると悪寒が走る。

「早く人が居る場所へ行くしかない——」

「ブモオオオオ！」

右手を左手で添えつつ急いで立ち去ろうとしたところで、先程と鳴き声が微妙に違うものが遠くからこちらに近付いてくるように聞こえてきた。

その声を聞いて更に悪い予感が走る。

当たつてほしくはないのに、こういう時の悪い予感は大抵当たるものだ。

徐々に目の前に迫る何か。木々がなぎ倒される音を響かせながら、地面を蹴る音が近くなる。

鳴き声だけじゃなくここまでくれば、ハツキリと明確にこちらを目標にしているのは理解できた。

そしてすぐにその何かは現れた。

「ブモオオオオ！」

先程のイノシシ（仮）より数周り大きいサイズのイノシシ（仮）だ。

言うなれば大イノシシ（仮）だろう。

牙は無い事から察するに親か番の片割れと予想できる。

「マジかよ……ついてねえ……」

自分の想像が当たった事が嫌で、気分が大きく落ちる。

既に拳を振るう力もない。それに大きさが違いすぎる。

子猫に蹴りを入れれば致命傷でも、ライオンに蹴りを入れたところで致命傷にはなりえない。

全快だつたとしても正直走つて逃げだしたい気持ちだ。

新しく現れた大イノシシ（仮）は、両方の前足を高々と振り上げ地面へと力強く打ち付ける。

その衝撃によつて地面が揺れ、うまく立つていられずに尻もちを付くように倒れてしまった。

「地面が揺れるつてどんだけだよ！ クソツッ！」

絶望的な状況に文句を吐き捨てるがこのまま座り込んでいても危険だ。

頭では理解していても相手の大きさに恐怖しているのか中々体は言ふことを聞かない。

しかし震えていても仕方ないのもわかっている。  
複雑な気持ちを抱えながら気合いで立ち上がり、力の入らない拳を握つて構える。

「脱力の構え。なんつってな。あく、こりやここで死んだな俺。」

立つてこそいるが、先は見えている。

それに相手を見て自分の直感が告げる。世の中気合いと根性でどうにかなるものと、どうにもならないもの。

切り分けるなら今の状態は後者であろう事として、誰の目から見ても明らかだろう。

「ブモオオオオ！」

「だからつて黙つてやられると思つてんじゃねえぞ豚あ！」

まるで敵討ちだというように、勢いよく大イノシシ（仮）はこちらに向かつて突進をかける。

ただ、やられるのがわかつていてバカみたいに棒立ちするつもりは無い。

「くつ！」

なんとか突進を回避しようと右へと跳ぶが、先程のイノシシ（仮）と違い、その潤沢に蓄えられた脂肪の巨体によつて、回避しきれずに車に撥ねられたように飛ばされる。

「がはっ！」

体を錐揉み状に跳ね飛ばされ、背中から木に叩きつけられた。

次いで肺の中の酸素が胸を押し付けられるようにして無理やり絞り出される。

必死に呼吸をしようと悶えるが、息を吸えば吸う程苦しくなりうまく呼吸ができない。

逆に何かが喉の奥からせり上がりてくるようにして吐瀉物を噴き出した。

こりや肋骨が何本かいったか？

出てきた吐瀉物をよく見るとそれは自身の血だと理解した。

吐くような物は胃に残つておらず、内臓が傷つけられた事によつて吐血したのだろう。

懐かしい感覚もするが、社会人になつて初の体験だ。

普段から殴られていると慣れもあるが、久しぶりの感覚は思つた以上にきつい。

それだけ耐性というのは大事なのだ。

なんとかして立ち上がろうとするが、受けた傷は限界を超えているのか、肉体が言う事をきかず思うように動かない。

そんなことはお構いなしに大イノシシ（仮）が突つ込んでくるのが目に映る。

「ふう……」

頭の中で諦めにも似たような溜め息が自然と漏れる。

助かつても死ぬかもしれないし、このままじやどつちみち死ぬ。どちらにしてもバットエンドだろう。

それなら男らしく全力でやつて散つた方がかつこいい。

特攻隊とは相手を自分が潰れるまで殲滅する部隊だ。

それなら——

「ふぬっ！ 特攻隊長様をなめてんじやねえぞおお！ 立てやこらあああ

!!

震える足腰に喝を入れ、死ぬ気の咆哮を上げながら自身を奮い立たせた。

まともに声すら出ていないのだろう。自分の耳へと自分の声が掠れて聞こえる。

後の事など既に頭の中に無い。

今この時、この場所で全てを出して尽くるつもりの男の意地だ。

「ブモオオオオ！」

「毎回毎回突進ばつか、ざけんじやねえ!!死ね豚あ!!」

迫る大イノシシ（仮）の鼻つ柱に向かつて拳を放つ。

しかし気合いや根性でどうにかなるなどという質量じゃない。拳を打ち込んだ際に、右拳の指が節から骨を剥きだすようにして豪快に折れ、続けて肘が内側へと一緒に折れながら、再度跳ね飛ばされる。

「ぐつ……わかっちゃいたけど、やつぱりか……」

ある程度予想していたからこそ耐える事ができた痛み。

それに痛みは一瞬だつた。

限界を一瞬で突破した痛みだからこそ、脳が苦痛を止めているのだろう。

砕けた右腕、肋骨も何本か折れているだろう体。

暴走族時代でも骨折程度ならあるが、ここまで一方的にやられた事はない。

さすが自然という弱肉強食の世界だと感じる。ただ、それでもまだ俺は生きている。

(ん？あれば？)

自分の体の状態を確認していると、落ち葉に埋もれた何かを見つけた。

それが何か予想できた為、動く左手を使って死に物狂いでそれを手繰り寄せる。

「はは……これが最後の希望ってか。まさしく俺と同じ状態だなお前。」

手繩り寄せたそれは、鋸び付いてボロボロになつた今にも折れそうな剣のような物だった。

元の装飾や色など剥げてしまい、柄は欠け、刃先もとてもじやないが切れるとは言い難い代物。

それでも無いよりはマシと思える現状では最高の武器だ。  
勿論剣など実物を見た事も無ければ、触った事もない。

知識での剣の使い方は理解できても、構えも知らなければ、正式な使用法など一切知らない。

むしろバールや鉄パイプ、木刀やゴルフクラブなどの方が扱いに慣れている。

叩きつけるだけなら簡単だからだ。

ただ、仮にこのような武器があつたとして目の前の相手に叩きつけてどうにかなるのだろうか？

いや、ならないだろう。

人間のデブに対しても多少これらで殴つたとして、悶絶させる事はできたとしても一発で意識を刈り取るような事は不意打ち奇襲でない限り中々ない。

来るのがわかつていたら当たり所が悪い場合を除いて痛くても我慢できるのだ。倒せるような事は普通ではない。

なら自然に生きるこいつらにはどうだ？

通用するかもしれないが、ケンカと違つて命をかけている状態がデフォルトの奴らに対し通用するのか？

わからないが、同じように長物の打撃程度で倒す事は不可能だろう。

ただ同じ長物でも剣ならどうだ？

同じくわからないが、この大イノシシ（仮）になら通用するかもしれないとカンが告げる。

「これが最後。勝つて死ぬか。負けて死ぬか。同じ死ぬなら俺は勝つて死ぬ。それが男と思わねえか？」

意識も飛びそうなギリギリの状態で剣へと問い合わせる。

「はつ。昨日からずっと独り言しか言つてねえな。ま、愚痴つても

しゃあねえ。」

勿論返事などあるわけないのはわかっている。それでも言わずに  
はいられなかつたのだ。

生まれる場所は選ぶ事が出来なくとも、死に方は選べる。  
ならば後悔しない生き方を自分は選びたい。

「くう……きちい。ただ、お前と俺の最後だ。この豚に一矢報いて一  
緒に散るか。」

左手に握った剣へと喋りかけながら、杖替わりにして立ち上がる。  
途中右手の状態に目を向けたが、グロ満載の状態。  
指は複雑骨折だろうし、腕は解放骨折。ただ繋がつてている状態だ。  
当たり前だが感覚は一切ない。

勿論その右手だけじゃなく肋骨は折れているだろうし、他にも外傷  
として擦過傷や裂傷など、数えきれない程度にはある。

外傷だけではないだろう。

吐血からして内臓のいくつかは逝っている可能性も十分にある。  
もしも「逃げても無駄だ。」と言われたとしても、この状態ではその  
場から動くことも振る事さえもできない。

できる事はただ一つ。構えるだけ。

「おい豚。俺たちの最後に付き合えよ。それでお前も最後だ。」

「ブモオオオオ！」  
「うおおおおお!!」

覚悟を決めたからか後悔が無いとは言えないが、負っている怪我と  
は対照的に気持ちはスッキリとしていた。

もつてくれよ。俺の身体。そして頼むぜ。相棒。

大イノシシ（仮）がトドメだと言わんばかりにこちら目掛けて突進  
を仕掛けてくる。

剣と大イノシシ（仮）と最後の正面衝突をする刹那の間。  
衝突の衝撃で体は力尽き、されるがまま跳ね飛ばされた。  
ただ、飛ばされながらもしっかりと目には映る。

大イノシシ（仮）が地面へと脚を折るようにして崩れ落ちる姿を。  
ざまあみろ……

大イノシン（仮）の姿に満足して頭の中で言うが、何もできずに腹から地面へと叩きつけられた。

周囲に静寂が戻る。何かが動くような気配も感じない。状況からすると勝負は終わつたのだろう。

ただ、勝つたとはとてもじやないが言い難い。

跳ね飛ばされた身体は動かず、今は地面へと熱い接吻をしている状態だ。

これが勝つたと言えるのだろうか。言つて引き分けという感じだろう。

何をしたのか。そんな事は簡単だ。

こつちは身体を動かす事は碌にできなかつた。

逆に大イノシン（仮）は直進でしか突進を仕掛けてこなかつた。それなら無理に動くより、剣を握り、鼻の先に刃先を置いておくだけいい。

面で無理なら、点で穿つだけだ。

後は獲物である大イノシン（仮）は勝手に突撃しに来てくれる。それで勝手に自爆したのだろう。

はつきり言つて勝率の悪い賭けでしかなかつたが、その賭けに勝つただけだ。

試合に負けて勝負に勝つた。ただそれだけだ。

ピロリロリン

ふう……さつきから二回目だが、何の音だ？ つても、もう俺には関係ないか。

まあ成功したところでこうなる事は予想の範囲内だつたけどな。ただ……逃げて無駄死にするよりは、この方が自分でも納得できる。

はは……まあ万歳だ……

それよりも今は……ちょっと寒いし眠いな……

そこで電池が切れるようにして思考がゆっくりとブラックアウトした。

王都フォルゲン

「ええい！どうなつている！」

身なりは如何にも高そうな赤い生地でできた服を着て、ゴツゴツとした指には貴金属類を嵌めている人物が苛立ちを隠そともしないで右往左往していた。

「申し訳ございません陛下。召喚の儀が成功したのか失敗したのか、未だ原因は不明でございます。」

少し頭の天辺がハゲた恰幅のいい人物が謝罪の言葉を口にした。「ルドルフよ。そんな報告をするために貴様は私の前にやつてきたのか！」

「申し訳ありません。」

陛下と呼ばれた人物の怒氣を孕んだその声に、周囲に居た護衛兵達は身体を強張らせている。

ルドルフという人物も同様に額から汗を流し固まっていた。流れているのは冷や汗だろう。

「いくら貴様が大臣でも、許せる物と許せない物があるというのを忘れてはないか？」

貴様は勇者の遺物を犠牲にして、条件が整つていらない状態で勇者召喚の儀を勝手に執り行つた。

その結果が成功か失敗かという事すら不明だと!?ふざけているのか貴様っ!!

「申し訳ございません。何分記録上で初めての出来事なのと、國の行く末の為にと思い——」

「もういい！近衛達よ！ルドルフを牢へぶち込んでおけ！」

命令された兵達によつて、ルドルフと呼ばれた人物は両脇を抱えられながら広間から連れ出された。

「勇者の遺物はもうない。一体どうすればいいのだ！このままでは……クソつ！」

「あなた。悩んでいても仕方ありませんわ。今はできる事を行いま

しよう。」

「シャールか。すまない……何とか世界会議で各国に事情を説明する。」

「あなたを支えていくのは変わりません。頑張りましょう。」「ああ。」

陛下とシャールと呼ばれた人物は憂いを嘆くようにして会話を終える。



「……は？ 今度はどこだ？」

目が覚めたが、視界に映る物はどうやらどこかの天井のようだった。

どこかのベッドのようなものに横にされているのだろう。

普通は夢なら覚めるとおはようございますだ。

目を覚ますと再度別の場所など、そうなれば口からでは疑問の言葉が適切だろう。

それにこれが可愛い女の子とホテルで目が覚めたらいいが、そんな雰囲気でもない。

至つて簡素な木材でできたであろうコテージのような天井だ。

笑い話のネタにすらならない。

ただ、死んでいない事だけは理解できた。

「あq wせd r f t g」

残念感満載で考えていると、顔を覗き込むようにして全く理解できない言葉を喋る少女に話しかけられた。

急に視界に入り込まれた事によつてまさかと驚いてしまい、上半身を起こして身構えてしまう。

そこで違和感を覚える。

「ん？ あれ？ 右手が治つてる？ というより、どこにも怪我が無い？」

自分の服をまくり上げ、イノシシ（仮）達にタックルを受けたであります腹部などを見てみるが、夢ではないのだろう。

服の汚れや破れこそあるものの、怪我が全て治つていた。

一体どれくらい寝ていたのか。

怪我が治るまでなら骨折の場合、数か月はかかるはずだ。

それにあれだけの骨折だ傷も残るはずだし、リハビリも必要だろう。

しかし、傷跡などはなく腕も指も動くし服もそのままだつた。

何がどうなつているのか理解できない。

「くあ wせ d r f t f」

こちらの混乱をよそに、顔を赤くして両手で覆う少女に再び話しかけられる。

赤面しているのは年頃であつて、男の肌を見て恥ずかしいのだろう。

とても愛嬌がある仕草に見える。

「悪い。」

服を元の位置に戻すと少女は覆っていた手の指を少し広げ、隙間から覗き込むようにして確認してきた。

こちらの姿を見て安心したのか、覆っていた両手を離した。

年は10代半ばというところだろうか。

ポニーtailの茶髪にブラウンの瞳を持ち、くりつとした可愛らしい目元。

その顔はどこか放つておけないようなまだあどけなさの残る顔だった。

身に着けて居る衣服は何の素材でできているのかわからないが、黄土色の上着に茶色の余裕を持つたパンツ姿だ。

農作業でもやるというのだろうか。

どこか牧歌的で、何というか一言で表すなら田舎くさい。

しかし、こうやって元気で自分が居る以上は、もしかして助けてくれた可能性もある。

失礼な事はできない。

「ありがとう。あんた、いや、嬢ちゃん。ん、君か。君が助けてくれたのか？」

「くあ wせ d r f t」

しかし、伝わっているのだろうか。少女の言葉を全く理解できな

い。

というよりもしろ聞いた事があるニュアンスでもない。

韓国、中国、ロシア、アメリカ、ドイツ、メキシコ、スペイン辺りなら文字は理解できないが発音で一応理解できる。

しかしそれらに全く当てはまらない。

という事はもつと別の地域の言葉だろう。

それに理解できないという事は、こちらの言葉も理解されないという事と同じだ。

「まいつたな……」

頭を搔きながら困ったようにしていると、少女はこちらの表情を見て理解したのか、軽く俯いて少し悲しそうな顔をしている。「君が気にしなくていい。俺が喋れないのが悪いんだ。こつちは元気になつて助かつたしな。」

「くあ w セ d r f t」

安心させようと身振り手振りで少女に元気だとアピールをする。子供が泣きそうになつてているのは苦手なのだ。

それが伝わったのか何かを喋り少女の表情は明るくなつた。こちらとしても明るくなつてくれるのは嬉しい限りだ。

「あ q w セ d r f t」

しかし、誰か日本語がわかるやつはないのか？

相変わらず少女に話しかけられるが、困つた状況には変わらない。「すまない。君の喋つてる事がわからないんだ。お父さんやお母さんを呼んで来てくれないか？」

いや、言葉がわかる人なら誰でもいい。最悪はカタコトなら英語か中国語でもいいんだけど。」

「あくあ w セ d r f t」

とりあえずは日本語が理解できる人間が居ないと話にならない。少女も身体を使って何かを必死に話しかけてくるが、理解しようとして本当に理解できないのだ。

頑張つて何かを伝えようとする少女。

その姿は微笑ましいが、理解できることで何ともいたたまれない

気持ちになる。

「あ q w セ d r f t g」

何かを言つて少女は部屋を出ていった。誰かを呼びにいったのだろう。

そりやそうだ。言葉も理解できない人間が居たら、俺でも理解できる人を呼びに行く。

むしろ最初からそうすればいい。

助けてくれたかもしれないのに何という態度だと言われそうだが、意思疎通ができないというのは思つた以上にお互いにとつて良い事はないのだ。

しばらく待つていると、少女が腰の曲がったワインレッドのローブを着た老婆の手を引いてやつてきた。

老婆と少女はベッドの横に座り、何やら二人で話している。

それを黙つて眺めていると、やがて老婆が紙のような物とペンをとりだし何かを書き始めた。

やがてペンが止まつて何かを書き終わると、その紙をこちらに見えやすいように向けてきた。

読めという事なのだろう。見せられた物にゆつくりと目を通す。

『この ことば りかい できますか?』

驚いた事に書かれていたのは日本語だ。

でも何故喋る事無く『ひらがな』なのか。

老婆と少女は不安そうな顔でこちらを見るが、理解している事を伝える為に紙とペンを老婆からジエスチャーで借り受ける。

老婆は快くペンと紙を渡してくれた。

『りかい できます。 にほんご わかる ひと いませんか?』

どのように書けばいいか少し悩んだが、極力簡単な日本語で文字を並べたものを老婆に見せる。

その文字を見て理解したのか老婆は薄い涙を目に浮かべた。

「わせ d r f t g y」

隣で見ていた少女が老婆に対して言葉をかけながら、どうしたものかとアタフタしている。

こちらとしても同じ気持ちだ。一体どうしたというのだ。ただ紙に文字を書いて見せただけじゃないか。

何か失礼な事でもしてしまったのかと一瞬考えてしまつた。すると老婆は再度紙とペンを貸してほしいというジエスチャーベビングを見せたので手渡した。

また筆談の要領で老婆が文字を書いていく。

『ごめんなさい このせかい あなたのことば わかるひと もういません』

再度、老婆に見せられた紙にはこのように書かれていた。

「はい?」

自分の頭の理解力が乏しいのか、それとも老婆が言葉足らざるのか。

実際に目の前の老婆は筆談でも日本語がわかつていいだろう。こちらの態度で見て取れたのか、皺くちゃになつた顔を更に皺くちゃにして申し訳なさそうな表情を老婆は見せる。

そのまますぐには次の紙へと文字を書いていき、同じようにこちらに見せて来た。

『わたしは むかし あるひとに このことば おそわつた  
そのひと あなた おなじせかいのひと  
あなたは ちがうせかい こつち きた』

「えーと。これは一体どういう――」

纏めようとしては解け、組み立てようとすれば崩れる。

そんなパズルのように全く考えがまとまらない。

こつちの世界? 同じ世界? どういう事だ?

というより、はいそうですかと簡単に納得できるような話ではない。

書いている文字だけだと、あまりにも突飛すぎるのだ。

『すこし まつ あなたに みせる』

こちらの考えを読んでいたのか、老婆は紙に待つていろという言葉を書いてから少女と何かを話している。

やがて話が終わつたのか少女は納得したという感じで再び走つて

部屋を出て行つた。

残された老婆との間に沈黙が流れる。

そこからすぐに少女が何かを抱えて戻つて来てから、こちらに冊子のような物を手渡してきた。

「えらい古びた状態のもんだな。ええくなになに?」

これを読めという事なんだろう。少女の手から受け取る。

今後の誰かへ

よう。初めましてか？

これを見て読めるつて事は俺と同じ日本からやつてきた人物つて事になるな。

まあそれと同時に、

これを読んでるつて事は多分俺はもう死んでるか、それとも元の世界に戻ってるつてわけなんだが、そこんとこ理解して読んでくれたらいい。

いきなりで何が何か理解できないと思うが大丈夫。

俺も最初は理解できなかつたからさ。

でも、理解して進むしかないだろうから、参考になればと思い筆をとつてみたわけだ。

俺にしては似合わないような事をしているんだがな。

まずは何か書こうか。

そうだな、まずはこの世界についてでも書いておこう。

お前がいた世界。そことは完全に別個体として存在するもう一つ世界と思つてくれていい。

簡単な言葉にするなら【異世界】つて事だ。

どうだ？興奮するだろ？

でも勘違いするなよ。

異世界だからと言つて何でもありかというとそうじやない。

これは普通に現実だし、怪我や病気が原因で普通に死ぬ。

それは元の世界と何ら違いはない。

じゃあどう異世界なのかというと、そうだな。

お前が経験したかどうかはわからないが、まず生きている生物や生態系が元の世界と違う。

気になるなら色々と見てみるといい。

一言で表すならファンタジーだ。そこらへんは向こうの常識が一切通用しない。

それに異世界というだけあって、この世界にはレベルやスキル、魔法という存在がある。

他にあるが気になるなら勝手に調べる。

全て教えてしまって楽しみがなくなるだろ？

次はレベルからだな。説明しておこう。

向こうの世界と違つてこっちの世界ではレベルという概念に沿つて生活している。

例えば生まれたばかりの人間はレベル1という形だ。

勇者だつて例外じゃない。

こちらに召喚されたばかりの時は漏れなく全員レベルは1だ。

ただの一般人より弱い。

それが例えガタイが良いボディビルダーであつても、ポツキーのような小学生くらいの丸メガネ君に単純な力勝負でなら負けるのだ。ふざけてるだろ？

こういう部分が向こうの常識を元にすると当てはまらないファンタジーだ。

大まかにレベルの詳細を分けると

体力、技力、魔力、攻撃力、防御力、精神力、速さ、賢さ

これらがある。

これらは年月を得て成長するにつれ上昇していく。

でもこれが本筋じやない。

年齢でも成長するが、モンスターとの闘いでも敵を倒すと経験値を得て成長する。

どちらが本筋かと言うと後者だ。

どうだ？ w i k i 並の攻略知識に感謝しろよ？

ふざけんなというツッコミはまだ抑えてもらいたい。

お前が今どれくらいの強さかは頭の中でステータスと念じればいいだろう。

そうすれば今のお前の強さがわかるはずだ。

今の俺達でだいたいレベル250前後だ。

それがどれくらいの強さかと言うと、レベル200程度あればそう

だな。

向こうの世界で言えば酸素がきちんとあると仮定して、物理的に素手で攻め入った場合、

アメリカ、ロシア、中国程度なら核を使用されたとしても単騎で全ての軍事力を前にして落とせるぐらいの実力だと考えてくれればいいだろう。

まあイメージしにくいだろうな。

もつと単純にする。例えばだ。200まで行かなくとも途中で体験できるのを羅列していこう。

角材で頭をぶん殴られたとしても、角材の方が勝手に折れる。ギロチンで首を落とそうとしても、ギロチンの刃が折れる。ようはそんな感じの現象がレベルが上がると経験できる。

まあ全部俺の実体験なんだがな。

おつと、何をしたんだ？とか言うヤボな事は言うなよ？

男なら誰もがやる、覗きだ。

ただ、覗いた相手が少し悪かつただけなんだ。

一度目はビンタ、二度目はパンチ、三度目に角材、四度目にギロチンつてな具合だ。

流石に覗きでギロチン台に上がるとは予想もしてなかつたけどな。それで、だいたいの目安なんだが

一般人でレベル5

兵士で20

冒険者で25

これくらいだと判断できるかもな。

中には飛びぬけてレベルが高い奴もいるし、逆にレベルが低い奴もいるが、それは極一部の者たちだ。

続いてスキルだ。

これは魔法とは別で、そうだな、居合い斬りや正拳付き

こういう向こうで言うところの技と思えばいい。

なんでこんなのがあるのかつて？

普通に正拳突きを打つたとしても、それはただの突きだ。

まあそれでも俺達レベルになれば適当なパンチで壁をブチ抜く程度なら簡単だけどな。

本題に戻ろう。例えば木があると思ってくれ。

スキルに対してEPという物を消費して同様に突きを行うとしよう。

すると、最初はただの正拳突きでは木を揺らすこともままならないはずだ。

それがEPを消費してきちんと打った場合、木を殴り倒すことができる。

どうだ？ 淫いだろ？

ぶつちやけ山田が数日前に『千手の破壊』というのを使っているのを見たが、まあまあエグかった。

殺しても殺しても再生するモンスターが居たんだが、あまりにしつこい再生能力のため、山田がキレたんだ。

そいつを空間のような物に閉じ込めたあと山田がスカルを放つた。まあただのパンチなら意味がないだろうが、EPを消費しているんだ。

ただのパンチじゃない。どうなつたと思う？

「いい加減死ね！ つか消えろ！ 再生するならそれ以上に引き千切つてバラバラにして、苦痛を与えてやる。

殺してくださいって頼みたくなるような地獄を見せてやるよ！」

こんな事を言いながら、山田の周囲に現れた金色の千手が、再生するモンスターへと襲い掛かつた。

まあそれでも再生するんだが、片つ端から触れる拳部分、そこから相手を肉片に変えていったんだ。

勿論再生すると言つてもモンスターは苦痛を受けるわけだ。

最終的には生きる意志というのが消えて、生きているのに全く動かなくなつた。

あまりにも可哀想だったので、最終的には俺が肉体の欠片も残さず魔法で魂の浄化をして殺してやつたんだがな。

せめてもの慈悲つて奴だ、勇者なのに悪魔の所業だなんて言うなよ

?

まあそんな事ができるのがスキルってやつだ。

続いて魔法だ。

まあ向こうの世界で言えば超能力の類と思えばいいだろう。

テレキネシスやパイロキネシスだ。

それがこちらでは魔法という名前と形を取つて、任意で具現化できるという意味だ。

どうだ？ 魔法なんて夢みたいな話だろ？

俺も最初はテンションが上がったが、修得時に夢ならよかつたと後悔した。

ぶつちやけ死ぬかと思つたくらいだ。

それは追々自身で経験してくれ。楽しみにしている。

一応一緒にやつてきたバカな連れ共は「弱い！ 弱すぎるぞ！」とか「俺最強！」とか黒歴史満載な事を言いながら今はモンスター共に向かつて魔法をぶつ放してゐるんだがな。

そうそう。

この魔法とスキルの違ひなんだが、言葉にするならこれだな。スキルは自分の内側のエネルギーを使用して形にする。

魔法は周囲のエネルギーを使用する。

魔法についてもうちよつと書くと、周囲から力を借りて制御に対してエネルギーを使用というのがわかりやすいだろう。

魔法以外にも上に書いたようにモンスターという敵が存在する。正直モンスターの理屈なんて理解できないし、しなくていい。単純に言えば野生動物と思えばいいんじやないか？

俺はそう考へてる。

それにパッシブモンスターもいれば、アクティブモンスターも居る。

パッシブというのは、こちらからアクション起こさない限り手を出してこない。

それに愛玩用モンスターもそうだ。

アクティブモンスターに関しては、見つかれば本能赴くままに攻撃していく。

まあパッシブモンスターも攻撃しようとすれば勿論反撃してくれるがな。

とりあえず俺らが呼ばれたのは世界の危機が訪れるという事で召喚されたわけなんだが、何か倒せつて指示があるからモンスターを殺してるわけ。

こつちの世界の住人は俺達の事を勇者だの勇者の欠陥品だのと言うが、簡単にするなら身入りが良いハンターだと認識した方が早いな。

ただ、正直気分が良い物じやない。

だつてそりゃだろ？

平和に過ごしてた動物に向かっていきなり攻撃を仕掛けて仕留めるんだぜ？

普通の良心があれば抵抗感満載なアクティビティだよ。

それに一応モンスター達は殺せば減るし絶滅する。

ただ、この世界の言い分も説明しておく。

なぜ殺すのか疑問に思うだろうが、生態系のバランスだな。

向こうの世界でどの時代から召喚されたかは不明だが、こちらは文明が遅れている部分があつたり、魔法のように進んでいたりする。

ここまで書けば理解したと思うが、モンスターを隔離するような技術の発展が行われていらないんだ。

だから殺すという手段を用いて調整している。

増えすぎた動物は他の種を絶滅に追い込む可能性があるからな。

ただ、モンスターの中でも殺しても絶滅しないのが存在する。

まるでゴキブリみたいな存在だ。

危機をもたらしているのはこいつらだな。

殺さなければどうなるかという疑問が出ると思うが、殺さない場合は単純明快。

人間だけじゃなく、他の種族やモンスター共もこいつらが殺す。それを防ぐ為に俺達が居る。

まあ中には殺しても死なない奴もいるんだけどな。梶本つて奴みたいに。

一回佐藤がキレて梶本を魔法で蒸発させたんだが、蒸気のようになふ散したくせに

翌日しつつ戻ってきて隣で朝飯を食っていた。流石に俺も少し驚いたぜ。

お前の体はどうなつてんだと。

お前が言うなと突つ込まれそうだが、釈明をしたい。

一言で表すなら

【勇者だから。】

不思議な言葉だろ？何かあれば基本これで済む。

でだ、この特殊なモンスターの根本を叩く為に【次元の狭間】という場所を探しているが、それがどこかは未だに不明だ。

早く見つかるといいんだが……

まあ辛氣臭い事は置いといて、この特殊モンスターが沸いたら俺らが召喚される。

要するにゴキブリ退治のバル○ンみたいな役目だと思えばいい。伏せているのは商標とか色々あると思うんだ。

だから察してくれ。

最後に書いておくが、さつき書いた連れについてだ。  
この記録を書いた原因の一つでもある。

俺はきちんと勇者召喚の儀で召喚された。

だから補正のような物が自身に掛かっていて自動的にこの世界の言葉や文字が理解できる。

しかし、連れ達は召喚の儀に失敗して中途半端に召喚されたんだ。  
さつき書いた勇者の欠陥品と呼ばれる奴らだな。

勝手に向こうの世界から拉致つてきたくせによく言うぜ。  
一回佐藤に対しても度を超えた扱いをした時に、マジでキレて王都の城の一角を消し炭に変えてやつたのはいい思い出だ。

ついでに書くと、その時に中村がノリノリで王都から見えるヴェノム山脈一帯を自称《トールハンマー》って魔法で丸ごと吹き飛ばし

た。

一応伝説の魔法に分類されてしまつたが、何の事は無い。  
ネタを明かせば、《サンダーボルト》つて魔法に馬鹿みたいにMP  
を突つ込んだだけのものだ。

本来《トールハンマー》はもつと威力が小さいし、俺達が使えば派  
手さは無いがシャレにならない威力が出る。

要するに魔法使いじゃなのに魔法使いを目指すそうとするバカ  
だ。

だから自称《トールハンマー》つてわけ。

それを考え無しの脳筋スタイルつてどう思うよ？

これで大魔導士様とか呼ばれてるんだぜ。

魔法使いって普通は古の知識とかどうたらがあるだろ？

そんなもんなくてただのゴリ押し。

やろうと思えばこれを書きながらでも俺ら全員できるつての。

俺は……まあ全員脳筋になるのはある程度は基本的に仕方ないと  
思つてている。

だつて、次元の狭間の敵以外、弱すぎて話になんねえもん。  
脱線しすぎたな。話を戻そう。

王都から見える山脈が変に繰り抜かれているのはそういう理由が  
ある。

その時の王の顔は引き攣つっていたと記憶してるがな。

今のお前がどうかわからないが、ぶつちやけ異世界から来た俺達が  
本気を出すと、この世界、俺らの中の誰か一人の力で死の星に変える  
ぐらいは簡単だ。

ただ、こんな力をもつてしても次元の狭間から生まれる特殊モンス  
ターとは良い勝負だ。

それだけヤバイ連中つて事が理解できたか？

俺はこいつらを必ず皆殺しにする。

平山と斎藤の敵討ちだ。あいつらは俺らを逃がす為に死んだ。  
次は俺らの番だ。一匹たりとも逃がすつもりはない。  
世界中から探し出して絶対に絶滅させてやる。

勇者が私情で動くなと言われるだろう。言いたい事も理解できる。  
ただ、勇者であつても人間だ。そこに感情はある。  
こいつらを絶滅させるのは普段ふざけている奴ら達も含め、総意  
だ。

だから俺達は次元の狭間を探している。

お前が一人なのか複数人なのには俺にはわからない。

ただ、次元の狭間から来るモンスターをなめるな。

そして許すな。

もし、俺達が死んで、代わりに召喚されたなら頼む。

あいつらを殺してくれ。

一応元の世界へと帰れる術を見つけたら書いていこうと思うが、今はまだ不明だ。

帰りたい気持ちもわからなくもないが、まずは言語を覚えながら強  
くなれ。

じゃなければ生き残れない。

話を戻すが、一応俺と出会った事によつて不便さはある程度は無く  
なつてゐるが、こいつらはこちらの世界の文字が読めないし、何を言  
われているか理解できなかつた。

でも安心しろ。

一応このバカ共にも真面目に教えて読み書き修得させた。

山本は何度も城から脱走して手を煩わせてくれたがな。

その都度毎回探し出して半殺しにして城に連れ帰つた。

やりすぎかと思うだろ？

でも安心してくれ、半殺しと言つても両手足を斬り飛ばして大人し  
くさせるだけだ。

中途半端に体力がある分、すぐに手足は再生魔法で治療すれば問題  
ない。

体を切り刻んでも体力が残つていたら何とかなる。

こういう部分がファンタジー感満載な部分だな。

まあ、やはり文字が読めない、言葉がわからないというのは日常生

活にさえ支障が出るレベルだと思う。

だから魔法なんかより、優先度は高い。

勿論途中で死んでしまつたら意味がないから、言語だけをやれとう意味じやないがな。

これを読んでいるお前が儀に成功しているなら上の事は無視してくれていい。

ただ、連れ達のように儀に失敗して召喚されたなら何かしらの欠陥があるはずだから一通り調べておいた方がいいと思うぜ。

一応連れ達の欠陥を箇条書きしておく

- ・読み書きと聞き取りが最初は全くできなかつた全員（修得済み
- ・成長が止まる不老（未解決
- ・死なない不死（未解決
- ・力の暴走制御不能（未解決 具体例→国一つを魔法で消し飛ばした

・性別逆転（未解決

・モンスターに異常に好かれる（好戦的モンスター含む  
まあ軽く思い浮かべただけでこんなもんだ。

お前に何の欠陥や能力があるかは俺にはわからないが、参考になれば書いた甲斐があるつてもんだな。

もう一度書くが、お前はこの世界の人間じやない。そしてこの世界は現実だ。

遊びじゃないし、HPが無くなれば死ぬ。

死ねば命は失われる。

そこだけわかつていれば何とかなると思う。

いきなりぶつ飛んだ事を書いたと理解しているが、

例えそれを認めようと認めなかろうと今のお前にはどうにもでき

ない。

だからこそ自身の頭で考え、力と行動を持つて最善を尽くせ。

ここまできちんと読んだならツッこんでいいぞ。

ふざけんじやねえええ!!

はい！プリーズアフタミー。

大丈夫。みんな通つた道だ。安心しろ。

んじやな。どこの誰かはわからないが元気でやれよ。

P.  
S

次元の狭間はこの手記を書き出してから封印した。  
だから消せる部分は消してある。

ただ、この手記は廃棄せずに残しておく。

この世界の権力者達は元の世界の政治家と何ら変わりはない。  
俺自身が下手に権力を持つていてるから尚更わかる。

正直クソな奴ばかりだ。

そんなクソな人間達によつて勝手に召喚された被害者の事を考え  
ることにした。

万が一次の奴らの為に少しでも参考になればと思い廃棄しないほ  
うがいいだろうとの判断だ。

あと、この日記は俺の嫁に預けている。

という事で手を出したら死んでも殺しに行くから手を出すなよ。

「ふう～……一通り読み終わつたが……ふざけんじやねえ!!  
はあ!?何が勇者だ!何が召喚だ!何がバル○ンだ!  
て事はなんだ?あのイノシシみたいな生き物はモンスターつてわ  
けか?

誰だ!誰が召喚しやがった!このやろー!

読み終えた紙を握りつぶしながらどうにもならない怒りを覚える。  
色々とツツコミたい部分も確かにあるが、それよりもあまりのふざ  
けた内容。

この内容が本当なら、俺は誰かの都合でこつちに召喚された事にな  
る。

しかも書いてある内容から察するに、俺は欠陥品つて事だろう。  
「つか帰れるんだろうなあ!こつちは働いてんだぞクソがあつ!

それに俺は便利屋じやねえぞコラ!つか召喚するなら無職でも呼  
んでこいや!

何で俺が召喚されなきやなんねえんだよ!貧乏暇なし、忙しいんだ  
よこつちは!

「あq wせd r f」

「ああつ!?

「t g rふえd w s」

ここに居ない召喚したであろう人物に対しても言葉を吐き捨てる。  
見つけたら必ずぶつ飛ばす。勝手に召喚した事を後悔させてやる。  
そんな気持ちを込めた上でだ。

怒りに任せて感情をぶちまけたが、それを見ていた二人。  
怯えながらも必死に何かを言う顔の少女に話しかけられた事に  
よつて、多少冷静になつた。

「ああ……悪い。二人には関係無かつたな。俺を召喚したふざけた奴  
に對して感情が抑えきれなかつた。許してくれ。この怒りは召喚主  
へとお礼参りでキツチリ倍にして返すさ。」

そうだ。彼女達が悪いわけじやない。

少女が心配しないように頭に手を乗せ、くしゃくしゃと撫でる。

少女は安心したのか、胸に手を当てホツとしたような仕草を見せた。

それを見て可愛らしいと素直に思いながら、そのまま老婆に再度ジエスチャードでペンと紙を借りる。

『ありがとう わたし なまえ』

「如月隼人。」

紙を老婆に見せる。

それに続けて助けてくれたであろう二人。

改めて自分に指を示しながら自己紹介するのが当たり前だろう。

「きやうらぎ はやと?」

老婆は名前を復唱する。

若干イントネーションが違うが、それでも合っているので頷き返す。

「きやうらぎ はやと y h t g r f」

「g t r ふえd」

少女から老婆へ名前を言つた後に何かを話している。

恐らくきやうらぎはやとつて何?と聞いているのだろう。

その質問に老婆があれやこれやと答えているように見える。

質問を終えたのか、こちらに向き直った少女が紙をこちらから受け取るようにして見せて來た。

『ありがとう わたし なまえ』

「アトラ」

自分の書いた紙をそのまま利用して自身を指で示してアトラと言つた。

続けて老婆へと少女は手を向けた。

「ミリュード」

ああ、なるほど。

自己紹介をしているのか。

それで少女の名前がアトラで老婆の名前がミリュードって言うんだな。

「アトラ、ミリュード。」

確認の為に左手を使いアトラとミリュードへと手を動かして復唱して確認する。

恐らく名前で合っているのだろう。少女は笑顔になり、大きく頷いた。

しかしまいつたな。

このふざけた冊子内容、言語を理解するために習うしかないようだが、その前にとりあえず試してみるか。

ステータス

如月隼人

L V 8

H P	1 2 8 / 1 2 8
E P	8 0 / 8 0
M P	7 5 8 / 7 5 8

制限中

攻撃力	1 9
防御力	2 3
精神力	5 8
速さ	2 3

称号 元特攻隊長

パツシブスキル なし

アクティブスキル 怒りの一撃10 (C T 1 2 0 s) 剛の鎧10

(C T 1 8 0 s)

魔法 制限中

なんだこれ？

「t g f れ d!？」  
「t g r ふえ!？」

ステータスというものが顔の正面で浮かぶように表示された事によつて、アトラとミリュードが何やら驚いているようだ。

というより二人は読めるのだろうか。それに一体何に驚いているのか不明だ。

自身ではRPGゲームなどもう10年はプレイしていないが、記憶にあるRPGではどれも似たような表示で、驚く要素に心当たりがなかった。

しかしこれが自身のスペック。いわゆる性能というやつか。

何となく値段を決められたみたいで気に食わない。

ただ、二人を見て大方予想するならば、冊子に書いてあつた一般人のレベルより3高い事についてか、MPだけ異常に高いことだろう。そもそも書いていた話と違う。

冊子には勇者は全員レベル1から始めるとあつたが、今の自分はレベルが8だ。

「もしかしてあれか？イノシシか？」

右手で顎を触りながら考えられる可能性を考慮する。

イノシシ（仮）と戦つて2体倒した事によつて両方とも変な効果音のようなものが耳に聞こえた。

もしその音がレベルアップの音ならばこの疑問に対し納得できた。

しかし、レベルアップとは普通に考えて1ずつ上がるものじゃないのだろうか？

経験値らしきものは見えないが、なぜ8などという飛び級式になっているのか？

疑問は疑問を呼ぶが、答えなどわかるはずもない。

何故ならここは異世界らしい常識が通用しない世界らしい。

つまり疑問を持つだけ無駄だという事だ。

「ふう～……勘弁してくれ。」

現実逃避したい気持ちに駆られるが、本当にあの冊子に書いていた通りに出たという事はここは異世界なんだろう。

ただ、このMPに制限中つてなんだ？修得時に死ぬかと思ったと書いてあつたが……

これは嫌な予感しかしない。

勇者が死ぬかと思ったという事は、いざれ自分もその道を通る事になるのだろう。

それだけは避けたいのだが……それに既に死にかけた自分からすると笑えない冗談だ。

それに俺の賢さについても一つ文句を言いたい。

なぜこんなに低い？

どこにクレームをつければいいのかわからないが、気分が非常に悪い事この上ない。

もしこれを設定した奴がどこぞの神様なら、

「なんていうかあ～、君つて勉強できなさそうじゃん？　ふ～クスクス。」

とか言われたら顔面にグーパンを打ち込みそうなレベルだ。むしろ連打だ。

まあ一応強くなれとあつた。

全てを信じる程バカではないが、ステータスが本物である以上、イノシシ（仮）の事を鑑みても、まずは鍛えてからになるという事か。その前に言語。

どうせ今帰ろうとしても方法が無いなら仕事は諦める他ないし……並行して進めるのが賢いだろうな。

しかし勉強か～……きつついな～……

結論を纏めて二人へと身体の向きを変える。

「アトラ。」

名前を呼ばれたアトラは『なあに？』という感じの表情を見せた後、届託のない表情を向けてきた。

それを見て何となく後ろめたい気分になる。

しかしそうも言つてられない為、彼女からジエスチャーで髪とペンを再度受け取つて文字を書く。

それは自分にとつて今後の生活を左右するものに近い。だからこそ真剣に書いた。

『わたし ことば おぼえたい

しごと てつだう おしえて ください』

そう書いた紙をミリユードへと見せる。

どの道ここが異世界なら仕事をして収入を得て生活していくしか

ない。

それにあてやツテなど持ち合わせていない。

それならまだカタコトでも言葉がわかるミリュードに、ダメ元でお世話になる方がいいだろう。

しかしそう上手くいくとは思っていないのも確かだ。

いくらなんでも自分にとつては都合がよすぎるお願いな為、断られるのを前提した上でのお願いだ。

ミリュードはアトラと少し話したあと、考えるような素振りを見せた。

向こうが不安なようにこちらも断られるかもしれないという不安が頭をよぎる。

やはりダメか。

そう思っていた矢先、予想外な事にミリュードは頷いてくれた。こんなホームレスに近い、いや、ホームレスと言つても差し支えない初対面な自身を受け入れてくれたのだ。

それならば彼女達にできるだけの事はしよう。

そう一人心の内に秘める。

そしてもう一つの考えが自然と口に出た

「ここから始まるのか。クソッタレな異世界生活が……」

★★

1週間後

「おはようアトラ。」「おはよう。」

準備を終えた事で家を出るとそこには元気に【ミール】の世話をしている元気なアトラの姿があつた。

ミールとは元の世界で言うところの乳牛的な牧畜だろう。ヤギとヒツジを混ぜたような外見をしている。

性格は温厚で、意外と人懐っこいところが可愛い生き物だ。

そして何故世話をしているのかというと、それはこちらに来て知った彼女の仕事だ。

嫌な表情も見せずに男でもきつそうな牧畜作業。

それを当たり前のようにして当たり前にこなす。

そんな彼女の懸命さを見て、元居た世界の和樹辺りに見習わせたいとさえ思つた。

(そいいえればあいつは常に仕事は逃げの奴だつたな。)

「行くの？」

「あ、ああ。」

「そうなの。 いつてらっしゃい。」

友人たちを思い出しているとアトラにそのまま声をかけられた。

考えが明後日の方向を向いていた為に言葉が詰まつてしまつた。

それに対しアトラが言葉短く声をかけてくれた。

別にケンカをしているとかそういう事はない。

その証拠にアトラは見てわかるように笑顔で送り出してくれる。なんと良い子なんだろう。

もし自分に娘ができるとしたら、こういう素直な子がいいと願わずにはいられない。

万が一邪険にされようものなら多分心が折れるだろう。

一応あれからミリユードの所で世話になり、最低限の挨拶や動詞などは理解できるようはなつていて。と言つても、日常会話などは未だに全くわからない。

だから簡単な言葉でやりとりをしているだけだ。

逆にありがたい事にアトラの方が言葉を簡単にして合わせてくれている。

その為、何というか気を遣わせている毎日で非常に申し訳ない気分になる。

それにミリユードは部屋や着替え等までも用意してくれた上、仕事が終わると言葉を教えてくれる。

その成果が今の簡単なやりとりだ。

もし言葉がわからなければ、挨拶こそできたとしても何を聞かれているかなど理解不能だつただろう。

そして今の恰好はアトラと殆ど似たような黄土色の上着に茶色の

パンツだ。

まるでそれは傍から見ればペアルック。

まあそんな事を気にするような歳でもないし、貸してもらえるだけ  
でありがたい。

特に意識するようなものではないのだ。

ただ、ミリュードに教えてもらつてるのは言葉というだけあって  
文字は教えてもらえない。

理由としては、ミリュードはかんたんな日本語のひらがなは出来る  
が、こちらの世界の文字を知らないということだ。

これは【リットン村】では普通のようで、ミリュードやアトラだけ  
ではない。

リットン村というのはミリュードが紙と言葉で書いて『この ば  
しょ』「リットン」教えてくれた。

『村』というのは自分で村だと解釈している。

集落というには人は多いし、市や街と言うには少ない。だから村な  
のだ。

話を戻すと、この村では教養という部分が元から無い為だろう。  
男は子供の時から外に出て狩りをする。女は家を守る。

完全にどこかの部族みたいな生活習慣だ。

現代日本でやれば批判を受けるのは間違いないだろう。

ではなぜ日本語の文字ができるのかという部分だが、冊子には嫁と  
あつた。

もしかするとミリュードが嫁で、旦那が日本語を教えた可能性も  
あつた。

そこらへんを突っ込んで聞くのはヤボつてものだろうから、あえて  
触れずに入いる。

それに言葉の機微をどこまで理解してくれているかわからないし、  
自身としてもこちらの世界の言葉が殆どわからない。勿論機微など  
全くわからない。

なのでどつちみち理由は違えど同じだ。

ただ、文字の読み書きできなくとも、言葉は教えてくれる。

意志の疎通的に合つてているとは思つてゐるが、インスピレーションやボディーランゲージでやりとりしている部分もまだ多い。

後は村人等が話しているのを聞いて慣れるしかないと割りきつている部分もある。

そうやって文法や形容詞等を覚えていくのが近道だとも考えている。

教科書を見て頭に叩き込むより、現地に行く方が早いと言われるのは確かだろう。

元居た世界でも、とりあえず海外行つてみるかという安易な考え方でも基本的にビジネスじゃない限り言葉はどうにかなる。

それに24時間ずっと現地の言葉でやりとりするのだ。嫌でも覚えていく。

これが人間本来として持つてある順応、適応というやつだろう。

「はやと！ 行くぞ！」

村の入り口からリーダー格の親父から名前を呼ばれた事によつて意識を戻された。

入り口には少年や青年、親父達が集まり、剣や斧、鎧や弓を持つている。

何をするのかというと、今から狩りを行うのだ。

アトラへと別れを告げて親父達へと合流する。

最初は何をするのかわからずに付いていくだけだったが、今では一緒に行動している。

実際問題。何をするのかというと、動物を狩り野草などを手に入れて村に帰るのだ。

ちなみにここで言う動物とはモンスターだ。

それを各自に割り当てて持つて帰る。

持つて帰った獲物を女性陣が調理して家で食卓に並べるという具合だ。

良くも悪くも集団生活。人に合わせる事ができない人間には辛い環境だろうが、自分にとつて特に苦痛はない。

むしろチームに所属して後輩を纏めたりしていたし、仕事でもそこそこ人を纏めたりはしていた。それが理由だ。

ただ、今でこそ慣れたものの、本当にどこの文明だよと最初はツッコミたくなるくらい原始的な生活をしている。

まあそれでも悪くはないって感じで受け入れつつあるんだがな。

そんな事を考えながらみんなと村を後にする。

目的は近くの【ベリーウッドの森】。歩いて1時間程で到着する場所だ。

何故時間がわかるのかと疑問が出るだろうが、小学校の時に習うだろう影を見てだ。

出発する前に男達に地面へと剣を立ててもらい影の位置を覚えておく。

そして到着してまた同じように地面に剣を立ててもらい移動した影の量を覚える。

それとは別に人間の時速は歩行の場合として平均約5キロだ。

両方を合わせてアバウトながら算出しているに過ぎない。

最後に到着すればみんなで協力して森の中に入り、獲物を追い詰めて仕留め、村の女性陣からの頼みで野草を摘む。

これがリツトン村での男達の役割だ。

「w s e d r f t !!」

「j y h t g r f !!」

「はやと！ j m n h b g v f !!」

「わかってる!!」

森に入ると男達が騒ぎ出す。

わかっていると言つても何を言つているのか勿論理解していない。

言葉がわからないのだから当たり前だ。

それでもわかっていると言つたのは、男達を観察してどのタイミングでどのように動けばいいのかというのを学んでいるからだ。

ここは学校とは違うし、言葉も通じない。それにミリュード達に世話になつてゐる。

これ以上迷惑かけるわけにはいかないし、仕事は人から教えてもらうだけじゃない。

自分が仕事と思っている以上は、それ相応の結果を出すしかないのだ。

まあここ数日の間で何故か自分が村人達の盾になつてているような気がするのは気のせいとは思つていてる。

男達が騒ぐ方向へと一緒に向かうと、すぐにイノシシ（仮）へと遭遇した。

一応こいつにも名前があるらしくビーグという名前らしい。

ちなみにコイツは食える！というかどつちかというと旨い！

最初こそ外見で気持ち悪かつたが、他の青年達が捌いたのをその場で食べさせられた。

捌いたばかりの生だと臭みもなく、肉には程よい弾力とサシが入つており、多分ショウガ醤油あたりに漬けて食べると酒のあてには最高だろう。

そのビーグはどうやら2体いるようで牙を持つた1体が自身に狙いを定めているようだつた。

もう一体はリーダー格の親父が率いる村人達によつて追われている。

「はは。上等！かかつてこいよ豚！俺が食つてやる！」

こちらに来た二日目と違い、滞在1週間近く経過しているため身体も順応してきている。

それに狩りに参加する事によつて地味にレベルが上がつてているのだ。

経験値の仕組み自体は不明だが、モンスターにトドメを倒した時や、協力して倒してもレベルはアップした。

そこらへんは追々調べていけばいいだろう。

「ブオオオオ！」

ビーグは雄叫びを上げると、その長い脚を使い勢い良く突進を仕掛けってきた。

今ではそんなものは恐れる必要は無い攻撃だ。

それにまだ1週間だが、このビーグ。攻撃は突進しかないので知っている。

気持ちを落ち着かせて準備をする。

「《剛の鎧》！」

スキルを発動させた。多分子面からすると防御系のスキルだろう。別に使わなくても問題ないが、何せ初めて使う。実際スキルとはどんなものか試しておきたかったのだ。

結果、体に力が漲り身体の内側から熱くなる感覚に襲われる。

ステータスを確認すると防御力の横に（+50）という表記がついていた。

「よし！ 多分これはいけるな！」

村でもスキルか魔法を使えるのはリーダー格の親父だけだと思っている。

どつちを使っているのかなど違いを知らない自分からすると不明だが、とりあえず何かを使っているのは知っている。

なぜなら、今までにはスキルの使い方など不明だつた。

しかし毎回親父が狩りの時に何かを呟いた後、持っていた鉈が淡い黄色の光で覆われるのだ。

それを使ってよくわからない木のような生物を鉈で一刀両断したり、大きな昆虫のような物を撃退したりしていた。

自身もそれを見ての真似事で自分のスキルを発語してみたのだ。

「バツチコイコラア！」

おもいつきり日本語で荒げた声を出す。自身を鼓舞するようなものだろう。

迫るビーグにタイミングを合わせて両手で牙を掴み抑え込む。やはり衝撃が先日よりも弱いのを確認する。

勿論レベル自体は昨日からは上昇していない

先日ならばもつと後ろへと押されていたはずだったが、今は力で無理やり抑え込めている。

「はつはつは！ 昨日みたいにはいかねえぞ！ 両手で掴んでるんだ。絶対逃がさねえ！」

暴れるビーグを更に力ずくで抑え込み、身動きが取れないようになる。

「j mんhb g v f!!」

「「y h g t!!」」

周囲に居た青年の一人の掛け声によつて、他の青年達が声を合わせて各々の武器を持つてビーグに襲いかかつた。

両脇から鉈や斧、剣で斬りつけられ、しばらくしてビーグは動かなくなり絶命した。

村達は嬉しそうにハイタツチをしているが、もう一体はどこに行つたんだろう。

いつもなら割と早目に親父達も合流していたのだが何も音沙汰がない事が気になる。

誰かが仕留めたのか？

言葉が話せないため意志を伝えようにもどうにもならないもどかしさに悶々とした感情が溜まつていく。

まあそれでもこちらはいつも通りに片付けた。それほど心配する必要はないだろう。

気になる事を気にしないというのは多少気持ちが悪い部分もあるが、どうにもならないものはどうにもならないのだ。

いつも通り青年二人が倒したビーグの四足を2本ずつ持つて森の外へと運び出して行つた。

何故運び出したかというと、森の中では他のモンスターに出会う可能性があるために二人の青年達は安全な森の外で解体するのだ。

「うn y t b v r!?

「n y t b r v e!!」

茂みの向こうからいつもと違う誰かの叫び声が聞こえて来た。

その叫び声はいつもの声と違う。切羽詰まつた叫び声に聞こえる。

どちらかというと悲鳴に近いような声だ。それを他の村人達も理解したのだろう。

急いで声のする方へと残つたみんなと一緒に向かう。

少し走つて茂みを抜けて目に映つたものは、体長8メートル程の白

い虎に翼が生えたみたいな生物だつた。

「な、なんだよこいつ……」

神々しい姿の虎は、おそらく任侠映画で額縁に入つてもおかしくないような光景だつた。

その立ち振る舞いはまるで力の象徴。圧倒的強者の余裕のようなものさえ纏つていた。

しかしそく見るとその虎がリーダー格である親父を口に咥え、咥えられている親父は血塗れなのが視界に飛び込む。

足元には既にこと切れているビーグの姿も見えた

親父達に追われたビーグがどういう経緯かは不明だが、明らか親父達に仕留められた傷ではなさそうな状態だ。

どうする？ 親父は短い間だつたが見ている限りは確かに強かつた。俺が挑んでも軽く捻られるだろう技術の持ち主である。その親父が血塗れなのだ。

人数でどうにかなるのかと不安が込み上げる。

「むんやぶ！」

「お！ おい！ 待て！」

青年の中の一人が声を上げ、親父を助けようとしたのだろう。果敢にも虎へと攻撃を仕掛けた。

それを止めようとして声を上げたが言葉が伝わらない。

いや、伝わったとしても助けに入つていただろう。

青年の表情は傍から見ても額に青筋を立てているのがわかる。

しかし、青年の手に持つた斧は虎へと届かずには綺麗に横に跳んで躲される。

青年の動きも悪くないが、明らかに動く速度が村人やビーグと違いすぎるのは一目で理解した。

これはレベルというか次元が違うだろ。

そんな弱腰な考えが浮かぶが、ここに周囲に居る村人はどうやらやる気のようだ。

その態度は武器を構え、退くという考えは持ち合わせていないように見える。

しかし、相手の力量に合う人間が居ない事など冷静に観察している自分からすればわかる。

これは言葉が不明で観察するという事に徹していたからだろう。まるで猫がネズミを相手にしているような感じだ。

ネズミが怒ればネコを殺せるか？

窮鼠猫を噛むというよう、一撃入れる事ができても、どう考えても100人中100人が殺せるかと言われたら無理と言うだろう。

「グルルルル！」

虎は口に咥えていた親父を振り捨て、攻撃した青年へと襲い掛けた。

口から解放された親父は意識を失っているのか、動かないまま地面へと叩きつけられた。

「ちつ！ちよつとは落ち着けバカ！」

舌打ちしながら青年へ向かつて走り出した。

氣概は認めるが、無茶と無謀は違う。

先程青年が行つた行為は後者だ。

親父があの状態なら確実に親父の二の舞は最低限確定だろう。動きからしてどう考へても不利にしか見えない現状は、虎を討つにしても親父を救出して一度撤退するべきだ。

しかし、やはり巨体なだけあって虎と脚力が違う。

圧倒的に虎の速度が速い。ただ、それでも諦めるわけにはいかない。

「許せよ！こなくそく！！」

全力で飛んで青年の体に向かつて渾身のドロップキックを放つ。

両足に人を蹴る感覚が伝わり、青年の体が大きく押し出されるようにして倒れて地面の上を滑る。

ドロップキックのおかげでわずかの差ながら青年は虎の攻撃から逃げる事ができた。

しかし、そうなればどうなるか。

勿論そうなつてほしくはないがそうなつてしまふのは必然。青年と自分の体の位置が入れ替わるだけだ。

あ、これダメなパターンだわ。  
必然その攻撃は俺へと来るわけで――

「——っ!!」

「はやと！」

虎の振り上げた前足によつて横から殴りつけられるように飛ばされた。

あまりの威力によつて視界がブレ、痛みすら感じない。

飛ばされた勢いは衰えず、木々の何本かをへし折りながら、威力を殺してやがて体が止まつた。

念のためと言つて鎧を持たされているが、基本的に武器を使用しない自分にとつて両手ですぐに防御できたのは幸いだろう。  
もし自分が武器を持っていたなら慣れていない武器のせいで防御が遅れていたのは簡単に想像できる。

ステータス

如月隼人

L V 13

H P 8 / 195

E P 120 / 130

M P 1258 / 1258 制限中

攻撃力 25

防御力 29

精神力 98

速さ 27

賢さ 11

称号 元特攻隊長

パッシュブルスキル なし

アクティブルスキル 怒りの一撃10 (C T 120 s) 剛の鎧10

(C T 180 s)

魔法 制限中

「こりや……やべえ……」

ステータスを見て驚いた。

HPが残り8つて事はさつきの一撃で瀕死になつてゐるという事だ。

正直なところ鉈だけではない。《剛の鎧》を使つていて助かつた。使つてなければ死んでいた可能性だつてある。

ただ、これから考えられるのは、次の攻撃だ。

例えどんな攻撃を受けたとしてもHPが0になるのは容易に理解できる。

0になればどうなるか。死ぬのだろう。それに、この虎だけじやない。

このベリーウッドの森にはビーグや他の生物も居る。

こんな状態で出会つてしまえば、例え今は助かつたとしても逃走さえできない。

なら、やるべき事は一つしかない。冷静な考へで判断を下す。

フラフラになりながら虎の居る元へと戻つた。

見れば虎の周りを囲みながら、石を投げたり弓を放つたりしている村人達。

あくまでケンカをしていた経験上から元にしたものだが、攻撃を受けた自分だからわかる。

投石程度の攻撃なんて無駄だ。強さの次元がビーグとは違う。

事実、ほんの数秒その場から離れただけで目に入る村人達の中には木にもたれかかる人物や、既に動かなくなつてゐる青年、首から上が無くなり地面へ倒れている少年も居た。

言つて自分はもう30だ。それなりに人生は大人になつても好き勝手やつて楽しんだ。

しかし中には若い10代前半だろうの男の子もいる。

命を失うには正直まだ惜しい。勿論自分が死にたいつてわけでもない。

それになんやかんやで見てわかるようにこここの村の連中達は仲間想いで、逃げ出そうとする奴はない。

その上、突然現れたような言葉を話せない自分にも優しく接してくれたのだ。

ならば自分が生かして帰してやりたい。次の世代の事を考えるべきだ。

「おらあああ！クソ猫！こつち見やがれ！」

その場で右手の中指をビシツと立て、虎へ向かつて吠える。

自身の声で青年達の動きが止まり、虎が牙をむき出しにしながらこちらをへと振り向いた。

あくまで注意を引く為に吠えただけだ。作戦もクソも何もない。（この間に上手く遺体は無理でも怪我人を抱えて逃げてくれればいいんだがな。）

「グルルルル」

「グルルルうつせえんだよ！俺が相手してやるから黙つてかかってこいやクソ猫野郎!!」

「む n y t b r v！」

虎に向かつて煽つていると、村の少年が何かを叫びながら虎と対峙するように左隣へと立つた。

そんな事は求めていない。早く逃げてほしいのだ。だからこそ伝える。

「邪魔だ！お前らはさつさと怪我人抱えて逃げろ！」

「m y n t b r v！」

（クソっ！日本語だと伝わらねえか。）

「仲間！逃げろ！」

焦りながらも現地の言葉を使ってカタコトで怪我人を指で示して伝える。

頼むからこれでわかってくれという思いを必死に言葉に詰めた。

「はやと！仲間！」

それでも首を横に振つて拒否するというのを行動で示してきた。胸が熱くなる感じだ。仲間の為に命を賭ける。チームをやつていた頃を思い出す。

ケンカで背中を預け、タイムマンでぶちのめす。

ただ、これはケンカじゃない。命を賭けたサバイバルだ。

それに同じように自分と残つたとしても、こいつらは薄々どうなる

か気付いているだろう。

分の悪い賭けに乗りすぎだと思う。

まあこういう奴らだからこそ守つてやりたいと思えるのだ。

ただ、村に居る女子供や老人はどうなる？

残された側の気持ちは？

俺はこちらの世界で一人だからいい。

でも他の奴は家庭を持っている人間も居るし、幼い弟や姉や妹がいる奴も居る。

それにこれから的生活の事もあるだろう。

ならミリュード達に恩返しをするなら、ここで虎に立ち塞がるのが恩返しになると想いたい。

だからこそ無理でも押し通す。

「うじゅひーぐる！」

「逃げろ!! 逃げろ!!」

何かを喚く少年に対して、おもいきり左手で突き飛ばすように有無も言わざず指示を出す。

親父が居ない今、これ以上ゴネるようなら殴つてでも帰らせるつもりだ。

そうする覚悟がこちらにはあった。

「わかつた……やんぶつる」

ようやく通じたのか、諦めたような、それでいて悟ったような表情で少年はこちらを見つめる。わかればいい。そうなるようにしたのだから。

一つの失敗が取り返しのつかない状況を生み出すという事を、自身が教訓にして次の子達へと伝える。人は失敗して成長するのだ。  
だが、怪我で済ませて成長するか、大怪我を負つて死ぬかでは結果が違すぎる。

他の青年達が倒れている怪我人を抱えて逃げ出した。

少年の続く言葉は死ぬなよって感じだろう。

自身としても死ぬつもりはない。ただ、倒せる見込みもない。  
なら少しでも時間を稼いで頃合いを見て逃げるだけだ。

そう上手くいくとは一切思っていないが、諦めだけは悪い。  
なるようになるさ根性でいくしかない。

逃げ出した村人達を見て追いかけようとする虎。

そうはさせまいと腰に掛けていた鉈をすぐに取り外して全力で投げつける。

こちらから視線を外した事によつて偶然鼻に先に鉈が当たつた。  
取つ手部分ではなく刃先が当たり、まるで鼻血のように血が噴き出  
した。

どうせあの巨体だ。ダメージなんか殆ど入つていらないだろう。

「グルルルル！ギヤオオオ！」

「はは。どうだクソ猫！獲物に逃げられた感想は？」

虎はやられた事へ激昂しているのか目を見開き、剥きだしていた牙  
を更に大きく剥きだして雄叫びを上げて爪を露わにした。

言葉を理解しているかのような反応に鼻で笑いが出た。

しかし、虎は叫んだ後はそのまま睨みながら空へと飛んだ。

「ちつ、これじや何もできねえし、逃げたところで鷺のように背後から  
掴まれるだけじゃねえか！」

まさしく手も足もない。

この言葉にぴつたりな状況へと持ち込まれた事によつて焦る気持  
ちに拍車が掛かる。

「卑怯だぞクソ猫——」

「グルルルル！グルアツ！」

虎が大きく口を開き叫ぶと同時に、口の前でバスケットボール大の  
白い光球が現れた。

どこかで見た事があるような光景を思い出した。

「これって意外とヤバイやつなんじゃねえか？」

自分の本心を表すかのように額を伝う汗の感覚。  
警戒しながらも光を見つめる。

今から何が始まるかなんて予想がつかない。

しかし逃げた所で蛇に睨まれた蛙のような状態もある。  
なら少しでも相手の挙動を観察するべきだろう。

何があつたとしても今この瞬間、見逃せば終わりなのだ。

「ギヤオオオオ!!」

空気を揺らす虎の咆哮に合わせるように、白い光球からレーザーのようなものが照射された。

地面へと注ぐ白い線はまるでホーミング性能を持つたようにして、地面を走るように草を焼きながらこちらへと迫つて来る。

「おいおい。冗談じゃねえ！なんだよこの攻撃！」

野生動物がレーザーを撃つって反則だろうが！ つてモンスターだつたな。

こりや納得。化けモンだ。」

焼き払われる草木を見て思う。

触れたらどうなるか、想像するだけで背中を悪寒が走る。初めて見る物理以外の攻撃に対し、フラつく足を引きずりながら虎の視界から消えるようにして森の中で必死に隠れる。

しかし、自動追尾性能を持ち合わせた白い線は、逃げても逃げても木々を焼き払い追いかけてくる。

「ちょー・隠れてもやっぱ意味ねえのかよ！」

反則みたいな攻撃を受けながら、ひたすらレーザーを躱す。

それはとてもカッコいいとはお世辞にも呼べない回避だ。

地面を転がり、四つん這いになりながら這う這うの体で何回ギリギリの所で避けただろう。

いつまで続くかわからぬ攻撃にひたすら耐えながら、早く終われと只々ひたすら願うしかない。

その希望は叶つたのか、しばらくするとレーザー照射は終わり虎が地面へと悠々と降りてきた。

「はあ……はあ……クソ！ やつと降りてきたか！」

こつちは既に体力的にバテバテだつとうの！」

体力的にバテバテ、きちんと例えるなら肉体的に死亡手前だとステータスで理解している。

しかし気持ちで負けるわけにはいかない。虎を眼光鋭く睨みつける。

何故降りて来たのかはわからないが、どちらにしろピンチには変わらない状況だ。

その拳動を一挙手一投足見逃さずつもりはない。

すると追尾レーザーで仕留め損なつたのが気に入らなかつたのか、喉を鳴らしながらこちらの様子を伺うようにして周囲を円形に歩き回る。

じりじりとその円が小さくなっているのには気付いてる。

恐らくタイミングを向こうも同様に見計らつているのだろう。

虎は爪を立てながらこちらに飛び掛かつてきた。

「はつー！それを待つてたんだよ！脚の一本でも置いてけや！『怒りの一撃』！」

勝てるとは微塵も思つていないが、やられっぱなしは癪に障る。せめて一撃でもというような半ばヤケクソに近い気持ちでスキルを使用する。

虎の振りかぶつたような前足目掛け、捻るように腰を入れた右手を使つてアッパーの要領で拳を打ち込んだ。

『剛の鎧』が防御なら『怒りの一撃』は攻撃だろう。

半分賭けだつたがその読みは当たつたのか、質量から想定するに普通の拳ならば返せないだろう虎の攻撃。

しかし、スキルを乗せた拳を受けた虎の右前脚は大きく打ち上げられ、体制を崩して土埃を巻き上げながら地面を転がつた。

「はあ、はあ、どうだー！ざまあねえなクソ猫。窮鼠猫を噛むつて奴だ。」

吐き捨てるように虎へ言つた後、周囲で退路になりそうな場所を探して移動しようとするが、それを察知したのかすぐに立ち上がつた虎によつて逃げ道を塞がれた。

見るからに軽快な動き。全くダメージは入つていないようだ。

せめて苦痛のような呻きや仕草を見せてくれれば希望も持てただろうが、火に油を注いだような咆哮を浴びせられる。

それを見て、例え上手くすり抜けて逃げれたとしても、背を向けた瞬間に後ろから爪を突き立てられるだろう事は容易に想像できた。

むしろ虎の元気な姿を見るとどうにもできない事は予想できる。

「あく、せつかく助かつた命を似たような事して散らすなんて、やつぱ俺、賢くねえな。

ステータス通りだわ。まつ、他の奴らは無事逃げれただろうし、それで由しとするか。」

自虐的に咳き瞼を閉じる。やれるだけはやりきつたつもりだ。後悔はない。

一応最後まで足搔くつもりだが、ここにきて見ず知らずの自分の世話をしてくれたアトラとミリュードの顔が、流れるように頭に浮かんでくる。

「短い間だつたが、まあ悪くはない異世界だつたな。

んじゃ、あいつらを確実に逃がす為にもうちよい付き合えやクソ猫野郎！――

瞼を開き最後の足搔きをかけようと構える。

こちらからは仕掛けない。

仕掛けた所で死が早まるだけだ。

それなら少しでも時間を稼ぐには仕掛けさせるべきだろう。

じりじりと距離を詰める虎、次の瞬間大きく右前脚を振り上げた。覚悟を決める。

「義に死すとも不義に生きず！」

自身の重んじる格言を口上で述べた。

その言葉を合図に一気に脚が振り下ろされる。

「む y b t v r c 4!!」

目の前に迫る鋭利であろう爪を前に、何かを叫ぶ声をあげながら視界の端の茂みから虎へと飛びかかる一つの影が現れた。

それが何かを確認する暇も無い。

「う・j・y・t・r・f!!」

その影が何かを叫びながら虎の頬目掛けて何かを振り抜いたように見えた。

急な出来事でその影が何かを振り抜いた事で人だという事しかわからず、その人物が何を行つたのかというのは認識できなかつた。

その人物が着地すると何かをされた虎は左前脚を使つて何かが触れたであろう頬を必死に抑え込んだ。

しかし次の瞬間、その頬辺りから続けて発生する爆発。

それに合わせるようにして頬の肉や赤い鮮血の一部が弾け飛ぶ。

数歩たたらを踏むようにして下がった虎。

そこに追い打ちをかけるようにして虎のガラ空きになつた腹の下へとその人物は滑り込んだ。

その動作は傍目に見ても一切の無駄が無いようにさえ思えた。

虎は器用ながらも傷を抑えようとするのに必死で、その人物への対処の余裕は無さそうに見える。

「g y t f y ぐ h！」

再度何かを叫ぶと同時に腹の下で剣を虎の腹部へと突き立てた。それを合図にしたように徐々に虎の腹部が膨張し、やがて大きく頬と同じように弾ける。

大方予想するところ、先程虎の頬を振り抜いたのはこの人物が持つていた剣だろう。

その攻撃を合図にしたように、赤い球が苦悶している虎を目掛けて一斉に飛来して襲い掛かった。

目の前で起こる状況を観察するが、元の世界であつてもこちらの世界あつても経験したことがない出来事だ。

一体この赤い球の塊達はなんだというのだ。

「一体なんだよ!? てか熱つ!?

それからも目の前で起こる出来事に理解が及ばず、ただただ呆然と見ているだけしかできなかつた。

何とか助かつた。

目の前の状況を見るとそれだけは理解できる。

烈火の如く苛烈な赤い球の攻撃を受けた虎はおそらく死んだのだろう。

勿論自分が殺したんじやない。現れた人物達によつて殺されたのだ。

茂みから現れた人間達が虎の生死を脈を取り確認しているようだつたので、間違いないはずだ。

ついでにいうと、確認の時に最初に虎に襲い掛かつた影が全身鎧を着た女の子だとわかつた。

何歳ぐらいなのだろう。アトラよりは確實に年上だと思う。

日本人の観点からすると20代前半と言つたところか。

その女の子は天使の輪と呼ばれる艶を持った黒と紫色の間の髪が綺麗に肩口で切り揃えられ、

普通ならばオカツパという表現が正しいのだろうが、その端正な顔立ちからするとオカツパとはバカにできない外見。

美人寄りな顔立ちはキリつとしたキツめの目元に、髪に合わせるような濃い同系統である紫色の瞳を持っていた。

元居た世界ではこんなカラーコンタクトや奇抜な髪色は中々いいだらう。

それにハツキリとした目鼻立ちはどこか異世界というよりは外国人を彷彿させる。

また、助かつた事による吊り橋効果なのか、凛とした立ち姿で胸を掴まれたような感覚に襲われ目を奪われドキドキしてしまう。

しかし、スラツとしたスタイルには少し残念な事に、上から下へ視線を流していくとサラシでも卷いているのか、胸が小さいであろう事は容易に想像できるスタイルだった。

そのスタイルもあつてか、宝塚歌劇団の男装のように剣を握る姿が

とても様になつてゐる。

「んく、Bカップか。」

「y b t v rせ！」

言葉がわからないというのとは別に、元の世界に居た時のノリ。素でセクハラ的な言葉がでた。

別に悪気があつたわけではない。普段がこんな調子なのだ。

高校生の頃など初対面の女の子のケツや胸を触るなどの行為は平氣で行つていた。

なのでそれから考えるといたつて落ち着いた方だと思つてゐる。

それに決してBがダメというわけではない。

そんなこちらの考えをよそに現場を毅然とした態度で仕切つて指示を出している女の子。

それに従うように動く人間達。

まるで慣れているというような行動を見て、口を出す事すら憚られる。

勿論言葉など話せないので口を挟むことすらできないのだが。

「t f g y ふ？」

すると女の子は指示を出し終えたのか振り返り声を掛けてきたが、やはり何を言つているのかわからなかつた。

その表情からするに疑問を俺にぶつけているのだろう。

自分の経験則から、その表情は疑問をぶつける時に見せるような表情なのだ。

まあ助かつたのは事実だが、ぶっちゃけわからないのは変わらない。

それならこちらの世界の言葉で感謝の言葉を伝えて立ち去ろうとすると、女の子は剣を收めてこちらへと手をかざし何かを喋つた。

すると淡い緑、エメラルドのような光が自身の体を包み込んだ。

温かい感覚が伝わり、ゆっくりとだが確実に身体の痛みが引いていく。

その光が消えると、完全に痛みが引いた。

さつきの喋つた言葉はこちらの体の怪我を治してくれる何かなの

だろう。

多分スキルか魔法というのを使っていたのだと推測できる。

別に治療を期待していたわけではなかつたが、これで帰りは一人でも幾分希望がもてるようになつたのは正直嬉しい。

先程の状態で帰ろうと考え立ち去ろうとしたが不安だつたのは確かだ。

ただ、こちらに来て二日目を思い出した。

右手の骨折や怪我が治つていたのは、こうやつて今のように誰かが村で治してくれていたのだと今更ながら気付いた。

一体誰が治療してくれたのだろうか。

アトラとミリュードも自分が治つてからはそのようなスキルも魔法も使つているのを見たことがない。

もし治してくれた人が居るならば、その人に直接お礼を言いたいと思う。

怪我が治ると更に女の子は何か質問のようにしつこく話しかけてきたが、相変わらずわからないのは確かだ。

一方的だと理解しているが、村人達も心配しているだろうという事で失礼を承知の上で改めて感謝の言葉を伝えて足早にその場を後にした。

帰り道の道中、虎にやられた村人の死体へと立ち寄つた。

二人の遺体を背負いビーグルを引きずり村へと足を向ける。

この世界、なめていたら守れるものも守れない。

よくしてくれた村人達の亡骸を背負いながら、ギリギリと自身の不甲斐なさに歯を噛む。

どうにもできなかつたとはいえ、弱肉強食を地で行く世界というのは、やはり力を付けるしかないのだと改めて認識させられた。

「勇者とか関係ねえ。もつと強く。

せめて自分に良くしてくれた人たちくらいは守れるようにな……」

勇者の冊子には書いていた。

村人はだいたいレベルが5。今の自分はレベルが13。

それでも勝てない相手は居る。

今の自分は兵士や冒険者よりも弱いのだろう。

ならば今村でそこそこ強い自分がしなければならない事は、同じ村人を守れるようにならなくてはならない事だ。

強かつたら守れただろう。

強ければ戦えただろう。

そんな未練がましい考えをすぐに吐き捨てる。

たからばではない。強くなる。そう決意を今ここに固めた。

「あんたら村人に必ず礼は返す。だから今は安心して逝つてくれ。」



怪我が治り既に冊子に書いていた一般人のレベルは越えていたため、多少なりとも一般人より今は力があるのだろう。  
少し無理を二人の亡骸を背負つてビーグルを引っ張れば移動も可能だつた。

「重いなこの豚がつ！」

八つ当たりのように吐き捨てながら家路へと一歩ずつ足を運ぶ。  
普通ならビーグルは置いていくだろう。

しかし、命を賭けて手に入れようとした食べ物であり、それが今自分が居る村の営みだ。

それで捨ておく事をするのは、命を賭けた者達へと顔向けできな  
い。

むしろ同じ仲間を守ろうと戦つたのだ。

それならば文句を言つたとしても、捨てていくなどという考えは頭の中には無い。

例えそれが他人からしてバカバカしい物であろうとも、こちらの世界の人間からすると狩りとは生きていく為に自分の命を賭けるだけの価値がある大切なものであるのだと認識している。

それに益のような形式ばつたものなどはないが、仲間とは元居た世界とは別でこの村では生死を共にする間柄なのだろう。

こちらに来た最初こそ元居た世界の癖で金で買ってこればいいじやないかとも思つたが、彼らの真剣な行動によつて自分がどれだけ

軽く見ていたのかを理解させられた。

それは滞在期間どうこうではない。惰性で社会を生きてきた自分とは違い、溢れ出る生命力を身近に感じたからこそかも知れない。答えはわからないが、それは決して他人が軽く扱つていいものではないだけ今では理解している。

ただ、普段は解体して持ちやすい大きさにして多数で持ち帰るが、解体方法などまだ知らなかつた。

そのため、無駄にしないためには引っ張つて帰るしか方法が無い。軽いとは言い難い重さのビーグによつて思つたように足取りが進まず、村へ戻る頃には陽も暮れかけていた。

村の入り口では無事だつた青年達や、アトラ、ミリュードが不安そうな表情で話しているのが目に入った。

大方の予想はつく。あの虎をどうするのかという事だろう。それとも自分の心配をしてくれているのだろうか。もしそれならやはり嬉しい。

そんな中、アトラがこちらに気付いて走つて来了。

「大丈夫なの!?

「ああ。」

「yんぶt 大丈夫?」

「大丈夫だ。大丈夫。」

心配しているという表情でアトラが話しかけてきたことによつて、やはり心配してくれているのだと実感できた。

素直に嬉しい。嬉しいからこそ守れなかつた者達へと申し訳ない気持ちになる。

彼等はもうこのようない前後の感情さえ無いのだから。

続けて駆け寄つて来た村人の女性は、背負つてゐる少年へと嗚咽を出しながら涙を流して抱きかかえた。恐らく母親だろう。

男性陣の事は狩りで知つていても、女性陣の事はまだハツキリと全員を知つてゐるわけではない。

「仲間……ごめん。」

これしか言えなかつた。

もう一人の青年の遺体を背中から下ろし、ビーグから手を放す。泣き続ける女性を見て自然と拳に力が入る。

それを見たアトラは同様に目に涙を浮かべながら遺体へと目を向ける。

作ったような涙ではなく、本当に悲しいのだろう。それが彼女の優しい一面でもあるのだ。

「俺、疲れた。今日、寝たい。」

流血で服が汚れたものの、疲れているぐらいで特に体調に問題はなかつた。

その言葉を聞いたアトラが黙つて頷く。

ミリュードや青年達へとアトラが何かを告げ、家へと足を向けた。

こちらの心情を察しているのだろう。

こういう言葉を多く語らずともわかってくれる彼女の優しさは今

の状況ではありがたい。

それに続くようにはと足を向ける。

人の死を身近に感じる事が無かつた元の世界。

失われるのはほんの一瞬の出来事だった。

そのせいもあつて若干精神的にもきていた。

途中青年達が近寄つてきて色々と話しかけてくるが、自分が喋れる謝罪の言葉を伝える事に終始してその場は去つた。

今はあまり考えたくはない。

後で聞いたのは負傷して生きていた者は、村の人の魔法で何とか治療して命に危険はなかつたようで、結果として死者は二人だけだつたようだ。

★★

王都フオルゲン

リーシャ・レオリウスは気になつていた。

リーシャは王都フオルゲンが抱える騎士団の一つ、レイス王女を護衛する直属の女性近衛騎士団団長である。

根が良くも悪くも真っ直ぐな性格の彼女は、王都に戻つた後にモンスター討伐の報を行う為にレイス王女の部屋に居た。

「どうかしたの？リーシャ。」

今話しかけたのが、このフォルゲン王国の王女。

レイス・マトリカ王女だ。

誰が見ても彼女だと一目でわかるくらい左サイドに一房だけ三つ編みを編み込んだ綺麗な腰まであるストレートの金髪を持っていた。吸い込まれそうになるエメラルドの瞳に、愛嬌はあるが可愛いとうよりは美人というのが適切な目鼻立ちをしている。

それに続くように艶のあるぷるんとした唇。

そんな彼女の魅力を更に引き立てる胸の部分が開いたピンクのドレスを身に着けて居た。

男性陣なら間違いないく一度は歩みを止めて振り返るだろう容姿をしていた。

「いえ。何でもありません。レイス様。」

「もう。様なんて堅苦しい呼び方はやめてつて言つてるでしょ。」

「それは……その……立場というものがありますし……」

「あなたが呼んでくれるまで何回でも同じ事を言うわ。」

旧友のようなやりとりはリーシャとレイスが幼い頃からの付き合いがあるからだ。

年はリーシャの方が少し上、リーシャが21歳でレイスが17歳だ。4歳離れている。

ただ、幼い頃は良くとも、大人になつた今はお互立場というものがあつた。

いくらリーシャが年上でも、王族に対して一騎士団の団長程度がないなあと話している相手ではないのだ。

そんなレイスが拗ねたような仕草で話す。

リーシャは何と答えればいいのか言葉に詰まり、自然とレイスから目を逸らしてしまう。

「それはそうと、今日はお疲れ様。スカイタイガーの討伐だったのでしょうか？怪我はなかつた？」

「はい。レイス……様」

「ほらまたあ。」

「申し訳ありません。」

「まあいいわ。許してあげる。で、上手く討伐できたの？」

先程までの軽い表情とは打って変わつて、リーシャは真剣な面持ちへと変わつた。

「それが——」

リーシャは事の始まりから討伐について報告を始める。

普段は人の居るような場所には出てこないスカイタイガーだが、ここ最近、【フォルゲン王国】と魔法国家【ルグニカ帝国】の間に位置する街道にて国を行き来する商人達からの目撃情報があつた。

それを危険視したフォルゲンの商人ギルドが、冒険者ギルドへと依頼を行つたのだが、生憎と手練れである冒険者達は他の問題で手があいておらず、手が空いている冒険者達を派遣したのだ。

と言つても、腐つても冒険者。

並の兵士達と同等か、それよりも普段は危険な仕事をする事も多い為、それなりに修羅場をぐぐつてている者達も多く居たらしい。

いくつかのパーティが組まれ、斥候4人1PT、本体12人2PT、後方支援6人1PT、挾撃用伏兵6人1PT、後詰6人1PTの総勢34人6PTが編成され討伐へと向かつたが、そこで予想外の事が发生了。

目撃情報からして1体のはぐれモンスターと認識していたが、現地へ向かい戦闘を行つていると、他にも2体居る事がわかり戦闘は混乱を極めた。

報告を受けた後詰が到着する頃には、前線の斥候は既に全滅。本体である2パーティはスカイタイガー2体による急襲によりほぼ壊滅。

伏兵であつたパーティは斥候が相手をしていた1体と戦闘中後方支援パーティは伏兵パーティを援護するので手一杯。2体に囲まれた本体を助ける事などできなかつたようだ。

既に戦線は崩壊しており後詰が入つた所でどうにかなる状態ではなく、むしろ死体を増やすだけだと判断しそのまま撤退。急いで戻つた後詰のパーティはギルドへと報告。

現状ギルドだけでは手が足りないというマスターの判断で国へと上がってきたのだ。

その為、このままでは商人だけではなく民への被害も出てくる恐れがある為に、

王の指示によつて本日は王や女王以外の近衛騎士団を含む大規模な師団が形成され討伐へと向かつた。

作戦はギルド側が1体を受け持ち、師団側が2体を受け持つというものだつたが、

ギルド側が討伐に成功、師団側が1体を撃破した所で残つた1体が逃走した。

一時見失つたスカイタイガーだつたが、逃げた方角へと追いかけて捜索していると森の奥で上空へと飛んで何かに攻撃しているのを調査に出ていた部隊が発見したという。

急いで陣形を整えスカイタイガーが居る地点へと向かう途中、男達が負傷者を抱え森の奥から逃げてきたのだ。

ただ、ここまでなら普通だろう。

しかし、すれ違う際に「仲間が俺達を逃がす為にまだ残つて戦つてゐる。助けてくれ。」と。

スカイタイガーの脅威を知つていれば戦う人間など殆どいない。大急ぎで目的地へと向かう道中、どうやらスカイタイガーにやられたであろう死体を目にした。

それを無視して走り続けて到着すると、まだ10代であろう少年がボロボロになりながらスカイタイガーの攻撃を回避しているのを見つけた。

リーシャは途中からしか見てはいなかつたが、そう。師団やギルドを動かしたくらいだ。

スカイタイガーはレベルで言えば40は討伐に必要だ。

それをまだ少年が辛うじてながらでも攻撃を躱し、更には一度だけだが迎撃したのだ。

その迎撃に満足したのか、少年は何かを叫ぶとやりきつたという表情が遠目でも見て取れた。

本人的にも勝てるとは思つていなかつたのだろう。

あくまで仲間の為の時間稼ぎに、自分が犠牲になる事を選んだのだとと思われる。

しかしその動きはまだまだ未熟ながらも戦いのセンスがあるとうのを見て取れた。

また、肝は相當に座つているようで、磨けば立派な戦士になると判断できる。

失う人材にしては惜しい。

それにその少年が隙を作つてくれたおかげで、こちらの不意打ちは成功し、続けての集中砲火にて撃破したという流れだ。

「そう。あなたも大変だつた。その少年に感謝ね。」

「はい。犠牲は出ましたが、3体とも討伐できたのでこれで危険は無くなつたと思われます。

しかし……」

言葉が詰まつた事によつてレイスは何かあるのか?というような表情でこちらを見つめている。

「撃破したので問題はないものの、その少年に疑問が残りました。」「何故?」

「途中で叫んだ言葉もそうですが、色々と説明を求めようとした。その為に質問をいたしましたが、こちらの言葉が通じなかつたのです。」

「それはどういうこと?村の人達とは言葉を交わせたのでしょうか?」

「わかりません。確かにすれ違い時に村人達とは言葉の疎通ができました。しかし少年だけは疎通ができず……」

「…………」

「負傷していた事もあり、治癒魔法によつて怪我を治しましたが、カタコトのような単語を話すだけで、すぐに立ち去つてしまいましました。」

「それは他国の言葉という事かしら?」

「いえ。多分それとは違います。私とてこの世界の他国の言葉なら

ば、訛りで意味は理解できなくとも、どこかの国という事は判断できます。」

「…………」

「聞いた限りでは、間違いなく今まで耳にした事がない言葉だつたと思います。」

リーシャの言葉にレイスは腕を組んで右手で口へと沿え、何かを考えているようだつた。

「最近のモンスター達の異常行動……何か関係があるのかしら。」

自身も気になつてはいたが、確かにレイス王女の言う通り、ここしばらく普段なら見かけないモンスター達が人里へ出てくる報告が増えた。

報告に上げた手練れの冒険者達もそうだ。

マスターへと事情を聞いた王の臣下達からの報告によれば、似たような状況でどうやら色々な場所へと討伐へ向かつていたらしい。

まだ我々には何も伝えられていないという事は、現状気にするレベルではないという事なのだろうから、あえて問い合わせするような問題でもないのだろう。

念のため、頭の片隅へと残しておくが。

「そうね。一度お父様へと報告しておきます。また何かあつたら教えてね。」

「かしこまりました。」

「ところで――」

そこからはレイスに押されるようにして女性特有のガールズトークへと突入していった。

3カ月後

「おはよう隼人。」

「おはようアトラ」

朝も早くからアトラはいつも通りミールの世話をしながら声を掛けてくれる。

こちらの世界に来て以来毎日みている見慣れた光景だ。

「今日も一人で行くの？」

「そうなるな。」

あれから3カ月も経過しているため、やはり学校で習うのとは違いますなりにまともな会話ができるようになつていて。

最近では現地の言葉で考え、現地の言葉で話すようになつていて。

TVで言っていた事はこういう事かと日々体感できている。

「あんまり無茶をしないでね。食べ物よりも命の方が大事なんだから。」

「…………」

虎の件があつてから、ちよくちよく同じような事を言われアトラからは釘を刺されている。

その言葉に対しても謀な事はしないが無茶はするだろうという考え方から、すぐに返事ができなかつた。

「返事は？」

「わかつてる。一応陽が暮れるまでには帰つてくると思うけど、必要な物はあるかな？」

こちらの内心を見透かしたようなアトラは叱るようにして返事を催促してくるのが、すまないと想いながらも「まかすようにして話題をすり替えた。

「そうね。そろそろベリーの実とアセロの実が欲しいかな。」

「ベリーの実はわかるが、アセロってどんな実だ？」

「ちよつと待つてて。どんな実かわかるように今から本を持つてくる。」

唇に人差し指を添えて考えるような素振りを見せ、希望の物を教えてくれた。

しかし自分にはわかるものとわからないもの、どちらかと言えば後者の方がまだまだ多い。逆に知っている物を教えてくれと言われた方がすぐに答えられるだろう。

そんな答えをきいたアトラは、俺に待つように言い残し足早に家中へと戻つて行つた。

それにしても3ヶ月か。月日が流れるのは早いな。  
仕事やあいつらはどうなつていてるんだろうな。

住めば都という言葉がある通り、ここはここで悪くはない生活を送つてゐるが、元の世界を思い出して多少寂しい気持ちに襲われる。月日や時間の流れとしてはミリユードから聞いてみた感じでは元の世界と同じ作りのようだ。

どうやら過去の勇者、まああの冊子を書いたであろうふざけた勇者達が使つていた暦をそのままこの世界では流用していちらしかつた。なぜそのような暦を使つているのかミリユードに聞いてみた事があつた。

答えとしてはそれなりの功績を彼らは残したらしい。

それもあつて、彼らが使つていた暦を国が認めめたという形みたいだ。

そんな事を考へてアトラが戻つてきた。

「あんまり走つてコケるなよ。怪我しても知らないぞ。」

「大丈夫。もう子供じやないわ。」

この世界での大人と子供の境界など不明だが、この村では働くようになれば大人という風習がある。

だからアトラは子供じやないと否定するが、どう見てもまだ高校生に入つて少しといふぐらいの感じしかしない。

要するにまだ自身からすると子供という事だ。

しかしそれを言えばアトラは怒るので今では言わないようにしている。

「あつた。これよこれ。この実の事。風邪の予防や健康維持の為にい

つもは置いてあるんだけど、そろそろ無くなりそうなの。」

「ふくん。どれどれ？」

アトラが葉のようないものを挟んでいる目的のページを開いた後、指で示して実の絵を見せてくれた。

文字を読む事はアトラもできないが、図鑑に近いもののためにそれが何かというのを見つかる。

手書きのような物の本だが、ハツキリ言つてこれを書いた人物は画力が相当高い。

元の世界でマスコットを書こうとして化け物を生み出したお姉さんも居たが、それとは真逆だ。

見て一発でどのような物か理解できる代物だつた。

「なるほど、赤い実か。サクランボのような物だな。」

「サクランボ？」

「いやいや、俺の居た世界の果物の事だ。」

この村の人達は既に自分が他の世界から来たというのを知つてゐる。

言葉を覚えていくにあたつて、少しずつ話して理解してくれていたのだ。

それを邪険にしたり、蔑んだりもせず、他の村人と同じように接してくれていた。

だからこそアトラやミリュードだけじゃなく、この村は居心地が良かつた。

「そうなんだ。それって美味しいの？」

「ああ。多少酸味があるが、さっぱりとした糖分とのバランスが絶妙なんだ。」

他にもジャムという物に利用したりもする。あ、ジャムってのはこちらの世界での蜜の事な。」

「へえく。美味しそうく。食べてみたいな。」

流石に3カ月も一緒に居ると、アトラの性格もかなりわかるようになる。

この子は優しい心の持ち主というだけじゃなく、純粹で食いしん坊

だという事だ。

今のアトラも想像に夢膨らませていてる屈託のない表情なのだ。

それに比べ、元の世界での10代半ばの女子高生など純粹とは程遠いスレまくつた子が非常に多い。

それは世間が他人への干渉を良しとしない風潮があつたのもあるせいだろう。

何かをすれば叩かれ、すぐに警察沙汰にもなる。

まあそんな事はこの村では関係ないんだがな。

むしろ他人へと干渉しまくりで、お隣さんに拳骨を食らうお向かいの子供とか日常茶飯事だ。

「もし向こうの世界から持つてこれたりするなら、アトラに食べさせてやるよ。」

「本当? 楽しみにしてるね。」

アトラからのキラキラした目を向けられ、多少背中がむずがゆくなる。

まつ、俺も男って事だな。

「ああ。それじゃあ行つて——」

「ここ」の場所を取り仕切る者は居るか?」

言葉を遮られるようにして、村の入り口から急に女の大きな声が聞こえてきた。

アトラから視線を外し、声の主へと流すようにして向ける。

前に出会つたあの女騎士のような恰好をしているような人物が、馬に乗りながら村の中心部へと向かつて叫んでいたのだ。

頭部以外は全身を鉄のような鎧で覆っている。

実際はそうでもないのだろうが、ガチャガチャして非常に動きづらそうな恰好だ。

それでも胸元は当時の女騎士よりは大きい。多分CかDだろう。しかし意外だ。何が意外なんだというと、馬は馬のまま存在しているからだ。

ファンタジーもクソもなく元世界まんまかよ。

そんなツッコミを ireながらもすぐに流す。

そんな事より別に言いたい事があるからだ。

それは常識を考えない程大きな声を出した赤いチンチクリンヘ  
アーの女に苦情を伝えるためだ。

一応チンチクリンと言つてもショートのツンツンヘアーというだけだが。

いくら早起きの村の連中と言つても村の中にはまだ寝ている幼子  
だつて いる。

なら文句の一つくらい言つてもいいはずだ。

「おい。朝つぱらからうるせえだろ。まだ寝てる子供もいるんだ。少  
しは声量を考えろ。」

「ん?少年、あの時の?」

声を発した女の隣に居た人物がこちらに聞こえる程度の声量で  
喋つた。

周囲の家からはチンチクリン女のせいで起きていた村人が何事か  
と外に出て来ている。

「あんた、あの時の女騎士か。その節は世話になつた。おかげで今が  
ある。」

「いや、それは構わない。あれは我々の不手際でもあつたしな。

それより少年。お前は言葉がわかるのか?

前は意志の疎通さえ難しかつたと思っているのだが。」

「ん?今はこのアトラやみんなのおかげでそれなりに言葉はわかる  
ぞ。」

それがどうかしたか?

「というより俺は少年じゃない。立派なアラサー男子だ。」

「アラサー男子?意味はわからないが、丁度良い。少年を探していた  
のだ。」

俺を探していた?

心当たりが全くない事に対しても思考を当時へと巻き戻す。  
うん。言つた。言つたな。

心当たりで言えば、虎を倒した時にBカツプかと言つた。  
もしかしてそれか?セクハラか何かの報復か?

いや、流石にそれはないだろう。ただ、試してみる価値はある。

「なあアトラ。お前Bカツプよりデカイよな？」

「え？ Bカツプ？ デカイ？ どういう意味？」

「いや、アトラ。お前は意味を知らなくていい。」

アトラのキヨトンとした顔をみて理解した。やはり意味は伝わらない。

意味を知つていたら多少なりとも他の反応を示すはずだ。  
となればこれが原因じやないだろう。

なら原因は一体なんだ？

セクハラ反対という声が聞こえて来そうだが、決してセクハラではなく眞面目に聞いている為異論は受け付けない。

「貴様を王都まで連行する。」

最初に声を出したチンチクリン女が、有無も言わさない高圧的な上から目線の言葉を放つ。

隣ではその言葉を聞いたアトラが驚いた表情を見せている。

その光景を見て聞いた村人も似たような顔をしているのが目に入る。

「大丈夫だアトラ。安心しろ。」

アトラへと声をかけ安心させる。

しかし、いきなり上から目線で言葉を放つチンチクリン女に対しては別だ。

そんな態度で言われてはいそうですかと言えるような人間ではないことぐらい自分の性格は理解している。

「おい女。お前が偉いさんだろ。俺に一体何の用だ？」

「貴様！ リーシャ様に向かつてその口の利き方――」

なるほど、リーシャって名前か。

というよりこのチンチクリンは後先考えない女なのか？

名前を知られるつて事は後から聞き込みを行い、張り込みして家まで普通に調べる事ができるんだぞ。

ただ、頭が軽い奴は扱いやすい。

どうせそんな部類だらうと勝手に自分の頭の中でカテゴリー分けを

行つた。

「黙れよ。チンチクリン女。そんなんじゃ彼氏もできねえぞ。」

「貴様ああああ！」

あ、地雷だつたか？

どうやら本氣で怒つたな。

リーシャの隣に居る大きな声を上げたチンチクリン女は、まるで口が裂けんばかりに広げて馬の手綱を引き千切りそうな勢いで怒りだした。

うん。チンチクリンは長いからヒス子でいいや。

村の青年達によつて、それなりに汚い言葉も教えてもらつていた。  
こんなところで役に立つとは思つてもみなかつたが……

「おい、リーシャつつたか？ テメエんとこは礼儀も知らねえ馬鹿を飼つているのか？」

見たところ騎士っぽいが、外見だけ騎士で中身は頭スカスカのボンクラか？

俺の世界の騎士はそれなりに礼儀を重んじる部類だつたと記憶しているがな。」

あくまで言つた内容の騎士は、アニメや漫画から引っ張つてゐる知識なだけだ。

現実の騎士など人間である。

絶対に騎士道とか言いながらも、裏ではだらしない人間も多いと確信してゐる。

理想と現実はむなしい程かけ離れているのが世の常だろう。

それに友達は

「武士道とは、死ぬことと見つけたり！ ならば騎士道とは？ やる事と見つけたり！」

など意味不明な事を口走つてゐた。

多分紳士を拗らせていきついた先だとと思う。

「これは少年の言う通りだ。すまない事をした。」

「リーシャ様！」

「いいんだ。こちらも理由を説明してなかつたのが悪い。

リーシャ・レオリウスだ。レイス王女の近衛騎士団團長を務めている。

リーシャという女は馬から降りて深々と頭を下げた。

若いのに出来た人間だと感心できる行動だ。

恐らく団長と言うからにはそれなりに人格者としても通つていないと務まらないのだろう。

「悪いが今はここで理由を説明できない。できれば無理やりというのはこちらも避けたいのが本音だ。

王都に来てくれたなら必ず説明すると誓う。だから一緒に来てくれないだろうか。」

隣のヒス子と違つてリーシャは真摯な態度で話してくれた。

しかし、王都というからには国を中心部分だろう。

しかも様と呼ばれるようなお偉いさんが、こんな村の外れまでやってきてピンポイントでご指名だ。

おおよそ考えられるのはあれしかない。

勇者関連——

しかし、自分からするとそんなもの知つたこつちやない。

恨みはあるども恩は無い。知らない人間より見知った仲間だ。

「勇者関連について。」

頭を上げたリーシャの表情が微かに動いた。

図星だつたのだろう。

伊達にこちらに来て観察の日々を送つてはいない。

人の顔色を見て生きるような事はしないが、自然と身に付いた特技だ。

「生憎、俺は勇者になんて興味が無い。

それに自分を勇者なんて思つてもいい。

どこか無職で暇な奴でも探すんだな。

何なら俺が勇者（無職）を探すのを手伝つてやろうか？  
まあ俺はこれから仕事だから冗談だが。」

「少年。できれば私は手荒な事はしたくないのだ。」

冗談の一つも通じないリーシャという女。

何と生真面目な性格なのだろうか。

しかしそれは融通が利かない女ではなく、どういう手段を持つても連れていくという脅しとも取れるような、はつきりとした意志表示だった。

下手に言葉が無い分横に居るヒス子よりも凄味がある。緊張した空気が周囲に張り詰める。

どうするべきか――

「行つてみたらいんじやないかな。話すだけでしょ？ もし嫌になつたらいつでも帰つてきたらいいんだし。ね？」

「アトラ……」

「その時はおみやげでも買つてきて。おばあちゃんと楽しみにしてるからさ。」

隣に居たあまりにも毒気の抜けようアトラの発言によつて、張り詰めた空気は一気に萎んでいく。

多分アトラはわかつていて発言したんだと思う。

初めて出会つた時から彼女は言葉を話せなくともなんとななく空気を読んだように気持ちを汲み取つてくれていたからだ。

穩便に済むようにしてくれたのだろう。

「はあく、しゃあねえ。おい。リーシヤつつたよな。

とりあえず話だけは聞いてやる。

ただ、まだ仕事が残つてるから行くなら仕事を片付けてからだ。」

「わかつた。手間をかけさせてすまない。」

「俺に謝らなくていい。感謝するならアトラにしておけ。

じやなきや俺はお前らの態度からして行くつもりなんてなかつたんだからな。」

★★

いつも通りにベリーウッドの森へと到着した。

今では森の最深部まで行けるようになつていて。

ちなみに今日は金魚のフンが2個ぶら下がつている状態だ。

それは何か？

答えは簡単。リーシャ達だ。

何故こいつらが居るかというと、村を出発しようとした所でリーチャ達が付いて行つてもいいかと言うので、下手に村に置いて何かをされるのを心配するよりは目の届く範囲に置いておいた方がいいと判断して連れてきたのだ。

「しかし驚いたものだな。毎日あの距離を走っているのか？」

リーチャ達は森の入り口に馬を置いて、今は歩いて同行している。

背後に居た彼女は感心したように口を開いた。

「そうだ。あんたに助けてもらつてわかつたんだ。

俺はたまたま助かつたが、あの時死んだ子も居た……」

「…………」

「別にあんたらを責めているんじゃない。

あの時に俺に力があればあの男の子達は今も元気に生きていたはずだ。」

「そうか。だから鍛えるついでという形か？」

そう言られて領いて返す。

虎の件があつてから、言葉を覚えると同時に自分で倒せるモンスターは自分一人で処理をしていった。

最初こそ言葉がわからないものの、親父が怒つて頬を殴られた。やりすぎだとも言わないし、横暴だとも思わない。

輪を乱せば皆に危険が及ぶのは自分も理解しているし、リーダー格だつた親父はみんなを守る責任もあるのだろう。

それにそれだけが理由じやない。

自分の事を心配して叱つてくれていたのだ。

言葉がわからなくとも、世界が違うと言つても、それは人として当然の行為だと思う。

それでも自身の無理を押し通した。

すると親父達は半ば諦めたようにして言葉がわからなくとも色々教えてくれた。

自分も必死になつて覚えた。

食べ物用のビーグだけではなく、害獣と呼べるものなども村の人達から教えてもらい倒す。自分一人で厳しい場合は親父達からもサ

ポートしてもらい、どう立ち回ればいいのかも聞いていった。

その甲斐あつて、今では一人でベリーウッドの森程度なら立ち回れる。

ただ、どうやら親父はレベルとしては10程らしい。

もつと高いものだと思っていたのだが、レベルは個々の強さでも技術は入つておらず

、総合力にはなり得ないという話だった。

親父はそれを理解していて、自分達にとつて本来不利なモンスター。

それに対しても攻撃の方法や村人を使つて上手く戦つていたという事だ。

それが理由で自分より低いレベルなのに、親父の方が比較した際に強く感じたのだろう。

要するに、自分にレベルが足りなくて厳しい敵でも、地形、武器、立ち回りを工夫すれば戦い方次第で自分よりも強い敵はいくらでも倒せる事も教えてもらえた。

しかし、いくら戦い方と言つても虎のようにあまりにステータス差が開きすぎるとどうにもならないらしい。

それを理解した為、こうやつて鍛えているのだ。

ただ、親父や村人達は特定のレベルまで行くと理由はわからないが、強制的にレベルが打ち止めになるようでそれ以上は強くなるのが不可能なようだつた。

おそらく勇者の冊子に書いていた物に沿つているのだろう。

自分自身は違うようで、レベルの上限というものに今の所は当たつてない。

モンスターを倒すとレベルは上がつていく。

これが召喚された者の特殊な力なのか。

こればっかりは勇者の冊子以外に教えてくれる人が居ない為、知る事ができない。

ただ、ステータスのおかげなのか、若干人間の枠からはみ出している動きができるようになつてきているのも理解している。

レベルを上げて物理で殴る。弱肉強食に對して、これをやるのだ。  
勿論ただ殴るだけじゃなく、技術も加える。

これは遊びではないというのも理由だ。

それとステータスについてわかつた事もあった。

レベルが上昇するにつれ、視力や聴覚、嗅覚、触覚も強化されるようだ。

超感覚と言えばいいのか。

意識しない場合は普通の村人達と変わらないが、意識すれば数キロ程度先までなら障害物が無い場合は見えるし、森のモンスターの事はかなり理解できたので何が居てどう動いているか音で判断できる。

例え擬態をして隠れていようとも、臭いや微かな気配で判断することも可能だ。

村で見た冊子に書いていた事から、これが俺の欠陥についてきた能力だろう。

イメージするならば潜水艦のソナーや航空管制塔のレーダー、蛇のピット器官のようにサーモグラフィで相手が何をしているのか理解できるのだ。

それとは別に

体を鍛えてレベルが上がると、その分ステータスの伸びしろが大きくなるのだ。

逆に鍛えずにレベルが上がるとステータスの伸びしろが少なくなっている。

だからこそ自分の肉体へと適度に負荷を与え毎日トレーニングを積んでいるというのもある。

ただ、疲れすぎるとHPは減っていくし、回復も遅い。  
逆に疲れてなければ回復も早い。

どうやらEPもそのようで、体調によつて変化が出るようだつた。

MPに関しては制限中だけあつて増減をした事が今まで一度も見たことがない。

魔法に関しても村の者に聞いてみたが、普通の人との修得方法と違

うようで修得は一つもできていなかつた。

### ステータス

#### 如月隼人

L V	3 8
H P	9 7 8 / 9 7 8
E P	3 8 0 / 3 8 0
M P	3 8 2 5 / 3 8 2 5
	制限中

攻撃力 1 7 5

防御力 1 8 4

精神力 3 2 8

速さ 9 8

賢さ 3 5

称号 元特攻隊長 野生を知る者 仲間想い

パツシブスキル なし

アクティブスキル

豪破内衝拳 2 0 (C T 1 2 0 s) 碎蹴脚 3 0 (C T 1 8 0 s) 金剛  
鎧 2 0 (C T 1 8 0 s) 神脚速移 4 0 (C T 2 4 0 s)

鬼神進軍 1 9 0 (C T 7 2 0 0 s)

魔法 制限中

一応スキルについてはそれなりに色々と確かめてみた。

C T というのは次に使えるまでの秒数のようで、例えば金剛鎧を発動させれば、次に発動させるまで 1 8 0 秒かかるという具合だ。

レベルの上昇過程で、スキルが変わった時は驚いたが、多少効果が変わっただけだつた。

また、効果時間も確かめてみた。

攻撃系は 1 撃の発動のみで、連打で打つても意味がなかつた。

逆に防御である金剛鎧は 3 0 秒だつた。

過去の剛の鎧の時は 1 5 秒だったので、それから考えると 1 5 秒伸びた事になる。

それに、効果も見れる。

今はステータスに防御力が 1 8 4 とあるが、これで金剛鎧を使えば

防御力の横に+100が付く。

表記で言えば184(+100)という具合だ。

このプラスがどれくらい影響するのかは不明だが、虎の件を考えるに1でそれなりに影響されてくるだろう。

そう考えないと木々をへし折るくらいの衝撃を受けて立ち上がる事など出来ないと考えるべきだ。

また改めてどこかで試す必要があるが、既にベリーウッドの森ではHPがまともに減るような攻撃を受けないし、そもそも攻撃を当たらぬよう動いている。

次は神脚速移について。これは速さの上昇だつた。

金剛鎧と同じで30秒しか効果が続かないが、使ってみて驚いた。常人とはかけ離れた速度を出す。

その脚力をもつて森の中で試すと、元々身体を動かすのは嫌いではないが、映画やアニメなどで見る三角跳びのような事が簡単にできた。

縦横無尽。この言葉がぴったりだろう。

これをもつて人間の枠からはみ出し始めたという認識が出来た。最後の鬼神進軍についてだが、レベル35になつて覚えた。

2時間のCTがある分恐る恐る使ってみたが、全身から黒いオーラが揺らめくように立ち昇り始め、総EPの半分を消費する変わりに身体能力が2倍に上昇した。

それだけなのかと思い、更にこの状態でスキルを使用してみたが、EPが減らない事を確認している。

その上スキルのCTを気にせずに連打が可能になつていた。

念のためにステータスの比較をするために、これを使用して碎蹴脚を試しに地面に放つてみたが、自身を中心にして地面に直径20m程、深さ5m程度のクレーターが出来た。

普通の碎蹴脚自体がその半分程度だったので、ステータスの威力は恐らく比率で強くなるのだろう。

勿論中心部が5m程なだけであつて、端の方に従つて緩やかな皿のような状態での穴だが。

今では雨によつて綺麗な瓢箪型の池となつてゐる。

ただ、これは二度と使いたくないと思つてゐる。

初めて使用した日は激痛に見舞われたのだ。

副作用とでも言うのだろうか。

全身を締め付けられる激痛に襲われ、まともに動けなくなつた事に起因している。

その際、ステータスを確認すると全てのステータスが1／3になつていた。

幸い効果が切れる前に神脚速移を使って森を出ていた為何事も無かつたが、

その日は激痛で動けない体のせいもあつて、森の外で野宿を覚悟したのだ。

一応夜になつて村の人達の捜索によつて見つけられ、無事に家には帰れた事は記憶に新しい。

もし森の中で動けなくなつていた場合、危険な状態になつていた可能性さえあつた。

それに、言葉がわからなかつたらそこまでならなかつただろうが、理解できる分帰つたらアトラの本気のお説教を受けたのも理由だ。

その時に初めてアトラが泣いて怒つていた事もあつて、次からは危険な場所での使用はやめておこうと考えた。

ミリユードはというと、やれやれ仕方ないというような感じで肩を落として首を左右に振つていたのを記憶している。

今思えば昔の勇者もこんなぶつ飛んだ力を使つていたんだろう。

山を吹き飛ばしたような事も書いてあつたし、それに比べればまだまだ可愛いものだと思つているが。

ただ、ステータスが戻るか不安だつたが翌日には鬼神進軍でステータスが減つていたのは全て戻つていた。

いつ戻つたのかはハツキリは不明だ。

寝て いる間かもしれないし、起きてからかもしれない。

ただ、目が覚めると痛みが無かつた事から、就寝中に戻つていた可能性が高い。

しかしこの世界、虎のような出来事もある。

自分の想像ではできない事に遭遇する可能性も十分にあるのだ。

最悪は鬼神進軍を使うだろう。

ただ、それを使って虎のように倒せなかつたらと思うと、今の強さに満足する事はできない。

例え倒せてもアトラやミリュード、村の氣のいい奴らが犠牲になつたらと考えるとまた後悔してしまふだろう。

そう考えるとまだまだ邁進するべきだ。

もし後悔をするような出来事が起くる可能性があるならば、後悔しないように今できる事をやつてからだろう。

ただそれだけしか今の自分にはできないのだから。

ちなみにこのスキルを覚えてからといふもの、二日程かけて鬼神進軍を村の近くで使つてみた。

最悪すぐに帰れるだろうという考えもあつてだ。

いくらステータスが2倍と言つても、具体的な効果がわからない場合は後の反動のようなステータス減少というデメリットは洒落にならない。

その為、必要な行為だと割り切つて使用した。

わかつた事はこの鬼神進軍の効果は3分といふ事だ。

どれくらい効果があるのか神脚速移を連発使用してみて、調べてみたのだ。

すると6回の使用にて黒いモノが消滅して反動が返つて來た。

「む？·あれは……

色々考えてみると、リーシャが訝しむように声を上げた事によつて意識を戻された。

見ればリーシャの視線の先にはフォレストウルフの群れが居た。向こうも気づいているようで、明らかにこちらを取り囮むようにして回り込もうとしている。

フォレストウルフは1メートル前後の狼のような外見だが、耳が異常に大きく発達しており全身緑色の毛に覆われているモンスターだ。恐らくこちらの足音を聞いて待ち伏せしていたのだろう。

全身緑色の毛というのは、周囲に擬態して茂みから獲物を狙いやぐするためだと親父は言っていた。

また、肉食の為、肉に臭みがあり食用には適さないモンスターらしい。

「1. 2. 3. 全部で9匹か。」

「厳しい数だな。今は退いた方がいい。」

「リーシャ。あんたが強いのは知っているが、これは俺の仕事だ。手を出さないでほしい。俺が全て片付ける。」

「本気で言っているのか？ 武器も持たずに一人でとは無茶だ。我々でも——」

「ああ。問題ない。」

遊びに来ているわけじゃない。それに元から無茶は承知の上。ただ、今のフォレストウルフ相手では無茶でもなんでもない。何かを言おうとしたリーシャの言葉を無視して行動に移す。

「待てっ！ 危険だ！」

飛び出した事によつてリーシャは手を掴もうとして伸ばしてきたが、動きが遅い。

難なく伸びた手を躊躇してフォレストウルフとの距離を詰めにかかる。

リーシャを擁護するならばこちらに来た当初なら危険だった。心配も当たり前だろう。

初めて遭遇した際はその素早さに翻弄され、連携に対しても手も足も出なかつた。

体は至る所に爪による裂傷を負い、噛みつきによつて肉が抉られた。

一言で表すならボコボコにされた。

ただ、一瞬の隙を突いて神脚速移にて逃走し大事に至らずに済んだ。

しかし、レベルの上がつた今ではどうとでもなる。

既に何度も戦っている相手だ。

こいつらのレベル自体は知らないが、強さは知っている。

今では朝飯前だ。

「今日はお前らを狩るのは目的じゃないから去つてほしいんだがな。」「グルルルル！・ヴォウ！・ヴォウ！」

距離を詰めたくせに言っている事が矛盾しているのは仕方ない。  
そのまま一緒に居れば彼女達まで巻き込んでしまうからだ。  
それに涎を垂らすその顔に威嚇の鳴き声。完全にやる気なのだろう。

う。

やはリアクティブモンスターという奴だろうか。

何とかならないものかと不本意ながらも戦う為に構えを取る。

「しかたない。さつさと終わらせる。こつちからいくぞ！」

まずは一番近くにいるフォレストウルフへと駆けだす。

それと同時に狙っているウルフが雄叫びを上げた。

これはフォレストウルフ達の攻撃の合図だ。

自分が狙われているから他のウルフ達よ。攻撃しろという具合だらう。

案の定左右から2体のウルフが大きな口を開け、首を狙つて飛び掛かってきた。

その2体に対してアイアンクローラーの要領で両手で1体ずつ口を掴む。

そのまま2体を合掌のようにして頭同士を胸元で衝突させて頭蓋を潰す。

周囲には脳漿が飛び散るが、一々こんな程度で気にしてはいられない。

回り込んだウルフが背後の頭上から更に1体が飛び掛かってきており、前方からは2体が足元目掛けて噛みつこうとしているのが目にに入る。

流石群れというだけあって相変わらず連携が取れている。

それでも――

「残念。それは通用しない。」

襲い掛かるウルフの攻撃に合わせて前宙をかける。

後ろから飛び掛かるウルフの両脇を両手で掴み、足元に襲い掛かつ

た2体のウルフの顔を踏みつぶす。

「これで4匹。残るは5匹！」

数を言葉に出しながら掴んだウルフの腹を両手で引き裂き、前方に居る2体のウルフの内、右手に持つて最初に叫んだウルフへと投げつける。

言葉に出すのは数を間違えないようにするためだ。

「これで5！残り4！」

腸をぶちまけるように投げつけられたウルフは、左へ回避の為に軽く飛ぶ。

フォアレストウルフの相手が村の親父達ならそれで射程圏外へと逃げ切れただろう。

しかし、こちらは既にレベルが38で村人とは速度が大きく異なる。

ダッシュで追いつき、間合いに収める。制空権の方が適切か。

空いた右脇腹へとしなるようにして蹴りを打ち込む。

苦しそうに血を吐き空中へと打ち上げられようとするウルフ。

そのウルフの首根っこを両手で掴んで背後から飛び掛かつて来たウルフへと回転するようにして叩きつけた。

首の骨が折れるような音と感触を空気へと乗せて、手と耳に伝えてくる。

恐らくそれが原因で死んだのか、叩きつけたウルフは掴んだまま動かなくなつた。

「3！」

今にも食いつこうとしていたウルフは、衝突した事によつて苦痛の叫びをあげながら逃走しようとするが、そうはさせない。

手負いの獣は厄介だ。その為確実に仕留める。

手に持つたウルフの死体を投げ捨て、急いで走つて追いかける。

距離はぐんぐんと縮められ、回り込んで逃走しようとしたウルフの背骨へとかかと落としを決める。

攻撃を受けたウルフはそのまま背骨が砕け、白い泡を吹いて痙攣の後絶命する。

「残り2！——」

「きやあつ！」

悲鳴が聞こえて振り返るところちらを襲うのは無理と悟ったのか、ヒス子へと2体が襲い掛かっていた。

リーシャが剣を抜こうと鞘へと手をかける途中だ。

しかしリーシャの動きからすると1体は間に合い倒せても、残り1体がヒス子へと襲い掛かるのがわかつた。

あれじやあ、遅い！

こんなところで怪我をされても後味が悪い。

それに後の呼び出しで何を言われるかわかつたものじやない。  
そんな考えから助ける事を選択する。

「ちつ。《神脚速移》！」

スキルを唱える。

全身に羽が生えたように体が軽くなる感覚に捉われる。

しかし若干距離があつた。

これでは走つたとしても間に合わない。

「伏せろ！」

大声で伝えるだけ伝え、地面を蹴つて跳ぶ。

そのまま続けて木を蹴るようにして跳ぶ。

ケンカと同じで、戦いというのも村の親父が言うように場数という経験と工夫だ。

普通にやつてできない事があれば、知恵を使って思考錯誤するのが人間だ。

その経験を活かす。

力を入れすぎた事によつて木々が蹴りの当たつたところから折れていくが、走るより跳ぶ方が速いから仕方ない。

すぐに追いついてリーシャ達二人の前に立ち、フォレストウルフとの間に割り込んだ。

1体が左太ももへと食いつくが、それを無視してもう一体へとスクリを放つ。

「《豪破内衝拳》！」

襲い掛かるうとしていた2体の内の1体の脇腹へとフックの要領で腰を入れたスキルを叩き込んだ。

スキルを受けたウルフは拳の触れた先から大きく凹む。

続いて反対側の脇腹から、臓物をぶちまけて太ももへ噛みついていたウルフへと浴びせる。

難しい理屈など不明だが、多分このスキルは外傷になる攻撃の威力をそのまま内部から破壊する力に変換しているのだろう。

その攻撃によつて腹部を四散させたウルフは即死したのか白目を剥いてそのまま足元へと身体は落ちた。

残つたのは最後の1体。

目の前の光景に驚いたのか最後のウルフは噛みついていた攻撃を止めて、そのまま背を向けるように森の奥へと走つて逃走していくた。

「追いかける!——ぶつ!?

走り出そうとした瞬間何かに引っ掛かるようにして腹部を四散させたウルフの身体の上にダイレクトにダイブした。

何が起こったのか理解できずに引っ掛けた方へと倒れたまま顔を向ける。

「なにしてんの?」

見てみるとヒス子が俺のパンツを掴んで顔を左右に振りながら泣きながら腰を抜かしていた。

その光景を前にして素の言葉が出たのは仕方ないだろう。

★★

あれからいくらか食用モンスターを狩つて、アトラに言われた実を取りつてから帰路に付いていたところだった。

「だつはつはつは。おいヒス子!」

「だ、誰がヒス子だ! 私にはきちんとリリアンという名がある!」

「アツハツハツハ。お前あんだけ強気な言葉のくせに顔も可愛ければ名前も可愛いなおい。」

「なつ!?か、可愛つ!?お前! 私を馬鹿にしているのか!?」

「アツハツハツハ。悪い悪い。イメージとは逆に、可愛いどこがある

んだなと思つただけだ。」

「リーシャ様！こいつ！連行しましよう！今すぐ王都に連れ帰つて拷問して牢獄にでも繋いでしまいましょう！」

「はあ……リリアン。諦める。お前が悪い。」

予想外のギヤップに一人爆笑してしまう。

あれだけ高圧的な態度の女が実は泣き虫でしたとは誰が聞いても愛嬌があつて笑つてしまうだろう。

その上で子供としてあしらわれたのが気に食わないのカリリアンは物騒な事を言い始める。  
しかし先程の出来事から鑑みれば、ママに泣きつく子供のようではがまた楽しい。

リーシャは相手をするのが面倒なのか、やれやれといった感じでリアンを宥める。

「それより、その、なんだ、お前の太ももは大丈夫なのか？」  
「ん？ 太ももがどうしたつて？ というか貴様とお前、呼び方が変わつてているがどういう心境の変化だ？」

「貴様っ！ いや……それは……私のせいで貴様の——」

「彼女は言つているのだ。私のせいで少年が怪我を負つてないのかと。」

モゴモゴと言い籠るリリアンの代弁をするように意味を教えてくれた。

その言葉を言い終えるとリリアンはバツの悪そうな顔をしていた。  
「も、もし貴、お、お前がキツイというならば、私の後ろに乗せてやる。」  
恥ずかしそうにリリアンは言つた後、馬の騎乗スペースを前にずらして一人分あけてくれた。

「あく、大丈夫大丈夫。これくらい慣れてる。むしろ気にするな。と  
いうかお前、ツンデレ？ マジかよ。あつはつはつは。」  
「つんでれ？」

「意味はよくわからんが、貴様！ 人が心配してやつてるというのに完全にバカにしているな！」

リアンのモジモジする仕草を見て言葉が浮かんだままに口にし

てさらに爆笑した。

まあ外見がツンツン頭の口が悪く気が強い女なら先入観を持つても仕方ないだろう。

隣でリーシャが完全に頭の中にクエスチョンマークを浮かべたような疑問形の言葉を口にした後、わなわなと震えたりリリアンが腰にかけた剣の留め具を外してこちらへと向け激昂した。

いや、本当こいつ面白い奴だ。

しかしこれ以上は完全に嫌がらせになるので、空気を読んで軽口はやめる。

「悪いな。冗談だ。そんな事より、二人とも怪我ないか？」

真剣な表情で二人に怪我がないか確認の言葉を投げかける。

リリアンの仮面が剥がれた事によつて嫌いな奴から幾らか好感度が上がつた。

「あ、う、こ、これでも騎士だ！私に怪我はない！」

「ふむ。男に心配されるというのは久しぶりだな。悪くない気分だ。」  
リリアンは未だテンパつたような状態で、リーシャに関するては何か達観したような物言いだ。

どちらも癖が強すぎるだろう。

もつと女の子っぽい姿を見せてもいいんじやなかろうか。

「まあ、二人とも怪我が無いならそれでいい。」

「しかし驚いたものだ。センスはあると思つていたが前に見た時とは動きが全然違う。

それによくあの距離から我々の間に入り込めたな。動きが全く見えなかつたぞ。」

「へえ、他人からすると動きが見えてないもんなんだ。  
自分の感覚だとわからないもんだ。」

「1体は逃がしてしまつたが、それでもあの8体のフォレストウルフ達を一人で倒したのも驚きだ。

しかも素手というのだから、どれだけ前に出会つた時より強くなつているのだ？

普通の兵士なら1匹でも手に余るような相手だぞ？」

「あ、俺も最初は鉈や斧、剣や弓を使ってみたんだけどな。

生憎と武器を持つより生身の方が性に合つてるらしい。」

「身を守る為の武器や防具を捨て素手の方が強いなど、他の兵士達が聞いたら呆れてしまいそうだ。」

「だつはつはつは。」

感心したような顔でリーシャが言うが、色々試してみていきついた答えが素手だ。

おそらくケンカしていた経験からくるもんなのだろう。

自分は頭で考えるより身体を動かす方が得意なのだ。

それに、あの時よりレベルは25も上がっている。

しかもレベルが上昇するまでに鍛えていたら、その分ステータスに上乗せされるのだ。

同じだと思う方がどうかしている。

「リーシャ様がこんな奴より弱いなんて絶対ありません！」

「悪いな少年。リリアンはこの任務が騎士になつて初めての任務なのだ。許してやつてくれ。」

「なははは。 そうなのか？

まあ初めてなら失敗して当たり前だ。それを糧にして成長していくべき問題ないだろ。」

「お前に言われたくない！――」

「感謝する。」

喚くようなリリアンの言葉を遮るようにしてリーシャが感謝の言葉を口にした。

なんというか、最初のイメージから本当に一気に変わったな。

背伸びしていたという事が。

ヒステリーのかけらもなく、見方を変えればいじられキヤラなんじやなかろうかこのリリアンは。

「それに強さについてだが、そこらへんは俺にはわからねえな。

比較する相手が周りには俺らのリーダーをやつてる親父しかいない。

それに既に親父達とは人間的に動きのレベルそのものが今では違

うしな。

比較するならモンスター達と比較した方が早い。

それに、強くなければ守れないだろ。それがわかつたのはリーシャのおかげだ。」

「人間と比べる方が難しいとは恐ろしい少年だな——」

「俺の名前は如月隼人だ。隼人でいい。それに言つてるだろ？」

俺はアラサー男子で少年じゃないて。」

「そうか。やはアラサー男子の意味はわからないが、隼人という名前か。では隼人。申し訳ないが、その、よければだが……」

「どうした？デートのお誘いか？別に構わないが、リリアンが怒るぞ？」

何気ない会話の中に冗談を混ぜただけで、今にも襲い掛かつてきそうなりリリアンの威圧に晒される。

まあ、威圧されたところで死ぬわけじゃない。

リーシャにぞつこんなのを承知の上で、からかうのが地味におもしろいから試しただけだしな。

「そ、そうではない！一度ステータスを見せてくれないかという事だ！」

リーシャは照れているというよりは驚いたように目を丸くして、慌てて言葉の続きを言い切った。

それにも、この世界の騎士みたいな奴というのは男慣れをしていないのか？

リーシャにしてもリリアンにしても初心な反応を見させてくれて久しぶりに面白いぞ。

「ははは。ステータスぐらい構わないが、お前ら二人とも男慣れしてなさすぎだな。

俺が居た世界のお前らぐらいの女の子達はもつとそうだな。

軽く男を掌で転がすように上手く操るぞ？」

「そ、そうなのか？覚えておこう。」

言葉こそ畏まつてゐるが、外見的には二人とも20前後に見える。男というのには興味があつてもおかしくないだろう。

こういう初心な反応を見せられるのを傍から見ると心が和むが、やはり二人ともそれなりな恰好をしているように見える為、所属的に恋愛規則には厳しいのだろうか。

まあ、どうでもいいな。

ちなみにあんたのステータスなんか私は気にしてないというような形でそっぽを向いたリリアンだが、無理してそっぽを向いている感じが滲み出でていた。

それを見て更にリリアンに親近感が湧いた。  
絶対扱いやすいわ。このリリアン。

というよりも、リーシャも人のステータスを見たいなんて物好きなやつもいるもんだな。

村の奴らは特に気にするような奴らじやなかつたし、やつぱり騎士団長という役職様は気にするもんのかね。別に隠すようなものじやないからいいが。

まあついでに参考にできるならしたいし聞いてみるか。

「なあリーシャ。俺のステータスも見せるから、お前のステータスも見せてくれないか？」

リーシャからわかつたという返答と共に、一度立ち止まり二人のステータスを同時に表示した。

ステータス

如月隼人

LV 38

HP 968 / 978

EP 320 / 380

MP 3825 / 3825 制限中

攻撃力 175

防御力 184

精神力 328

速さ 98

賢さ 35

称号 元特攻隊長 野生を知る者 仲間想い 軟派する者

パツシブスキル なし  
アクティブスキル

豪破内衝拳20 (CT120s) 碎蹴脚30 (CT180s) 金剛

鎧20 (CT180s) 神脚速移40 (CT240s)

鬼神進軍190 (CT7200s)

魔法 制限中

リーシャ・レオリウス

L V 4 3

H P 5 3 4 / 5 3 4  
E P 2 8 0 / 2 8 0  
M P 3 5 0 / 3 5 0

攻撃力 1 2 5

防御力 1 1 4

精神力 2 3 6

速さ 4 8

賢さ 7 2

称号 近衛騎士団団長 幼馴染 ハートキャッチャー

パツシブスキル 清淨なる加護

アクティブスキル

爆炎剣25 (CT120s) 音速剣30 (CT120s) 五月雨5

0 (CT240s)

魔法 ヒール30 (CT240s) アンチポイズン25 (CT240s) フィジカルアクティビティ70 (CT240s)

「なつ!」

リーシャとリリアンが同時に驚きの声を上げる。

アトラとミリュードに初めて見られた時も同様に驚かれたが、何に驚いているのかわからなかつた。

一応ドラゴン○○ストとファイナル○○ンタジー、スター○○シャンとロマ○○ングサガ並にはステータスに差があるのは理解している。

というより、一つ変な称号が増えている。  
むしろそつちの方が気になつて仕方がない。

あれか？先程のやりとりで追加されたのか？

そんなつもりは一切なかつたが。

「ん？どした？何か凄いのか？」

てか初めて他人のステータスを見たが、お前らのステータスが日本語で読めるんだが？

これはこれで違和感を覚えるな。

本じやないからか？それともこれがファンタジーってやつか？  
てカリリアン。お前興味無いんじゃなかつたつけ？」

バレないよう目だけで見ていたリリアン。

ステータスを隠れ見て確認したのだろう。

それが今は完全に固まつて凝視している

それを見て意地悪な表情を浮かべてからかいにかかつた。

するとリリアンはステータスから視線を外し、ジト目でこちらを見た後に大きく息を吸い込んだ。

「なんでこんな奴がこんなステータス！？ありえない！絶対に私は認めない！」

唯一認めるとしたら賢さだけ！」

「何？何なの？君は俺に何か恨みでもあんの？」

なんかさらつと酷い事言つてる自覚ある？

なんなら君のステータスを一回俺に見せてみようか？」

「い、嫌よ！なんでそんな物をお前に見せないといけないのよ！一回死んだらどう？」

ほほう。この女。いい度胸をしてやがる。

俺を認めるのは賢さだけと……

よし、俺にケンカを売った事後悔させてやろう。

「いや、本当に驚いたな。私より強いんじやないかというよりは、既に超えているのか。レベルこそ私より低いがステータスが賢さ以外全て私より高いとは。

しかもこのMP、桁自体が我々より違う。これが勇者か。」

「ねえ。君ら本当に驚いてる？むしろ逆に俺のこと乏しめようとしてない？」

絶対そうだよな？な？」

「む？悪い悪い。今までの努力が否定されるようなあまりの凄さで、リリアンの悪ふざけに同調してしまった。」

絶対にこいつら楽しんでいる節がある。

その証拠にリリアンはしてやつたりという表情を出しているし、リーシャは口元を抑えて困ったような表情で軽く笑顔になっているのだ。

悪いと思つてているような素振りが見えない。

ただ、変な距離感で堅苦しい感じより今の方が接しやすい。

今の空気の方が個人的にはありがたい部分もあつた。

アトラが優しさならリーシャは眞面目でリリアンはやんちゃりいう感じか。

「まあそれならいいけどよ。一応MPがあつても俺は魔法を使えないぞ。」

「ん？魔法を使えないのか？」

「ああ。そうだ。それよりも聞きたい。」

「私に答えられる範囲ならな。なんだ？」

「とりあえず進みながら話そう。」

二人を促して再度帰路を進みだす。

確かに勇者の冊子には兵士はLV20くらいと書いていたと記憶している。

それがリーシャという女の子はその倍以上の43だ。

一体どういう事だと疑問が湧くのは仕方ない。

「確か兵士、お前らが兵士、か騎士かはわからないが、俺が知った情報よりリーシャは倍以上強いんじやないか？」

俺に狩りを教えてくれた親父も一般的な人間より倍のレベルがあつたはずだ。」

「ふむ。騎士も兵士の中の一部だ。問題ない。」

それとレベルについてだが、私の家は代々マトリカ王家へと仕える

騎士の家系だ。

父も母も騎士の中では優秀な方でな。レベルに関しても一般兵より高かつた。

多分だが遺伝的な物もあるのだろう。その上相当鍛えて育てられた。

子供ながら逃げ出したくなるような毎日だったよ。

ただ、普通は隼人の言う認識で問題がない。

隼人に狩りを教えた親父という人物も、いくらか戦いに長けていたのだろうな。

その証拠に、リリアンはレベルで言えば年齢と同じ18しかない。

「ちょー！リーシャ様!? レベルは我慢しますが、何故こんな奴にプライベート情報を暴露するのですか!?」

「ん？ まずかったか？ それほど気にするものではないと思つたんだがな。

それなら私の年齢も教えるから許してくれ。私は21歳だ。」

「リーシャ様あ～……」

「お、おう。唐突な年齢報告ありがとう。リリアンどんまい。」

「うるさい！ お前が言うな！」

これはリリアンを擁護するしかない。

リーシャはちょっと普通の女の子よりもズレている部分があるのだろう。

それにしても遺伝と過程で成長が変わる、か……

「なら、例えば兵士をやっている人間が引退して、ただの一般人になるとどうなるんだ？」

意図的に設定されたように環境でレベルの限界値も変わる。

ふと疑問に思つた事を口にしてみる。

「それは、レベルが強制的に下がり5前後で収まるようになる。」

は？ なんだそれ？

あまりにあからさま仕組みに耳を疑つた。

「じゃあ逆に聞く。兵士から引退して一般人、そこからまた兵士になればどうなる？」

「そんなの当たり前じゃないか。レベル5から鍛え直しだ。」

おおふ。何という理不尽な世の中なんだ。

それに、その仕組みがさも当たり前のよう受け入れている世界。こいつらは疑問に思わないのだろうか。

「お前ら、よくそんな理不尽な仕組みに納得しているな。」

「何故だ？」

「だつてそういうだろ？自分の努力が全て無駄になるんだぞ？」

「仕方ないだろ。そういうものなのだ。」

そういうもの。ん。そういうものねえ。

まあこいつらが受け入れているならいいのだろう。

それに外野がどうこう言つたところで環境が変わるわけじゃないんだ。

しかし、俺なら絶対にそんなのはお断りだな。

初めてここで召喚されてよかつたという部分を体感できた。

自分なら努力を否定されるような仕組みはごめん被りたいからだ。そんなやりとりをしているとリツトン村が見えてきた。

「そろそろ村に到着するが、王都つてここからどれくらいの距離なんだ？」

「そうだな。だいたい片道6時間程だ。」

「そうか。それなら急げば明日の朝には帰つてこれるな。」

「何を言つている？ 多分だが数日はあちらに滞在してもらう事になるぞ。」

さも当たり前というようにリーシャは答えてくれた。

しかし冗談じゃない。

「は？ いやいや、お前わかってる？ こつちは暇じやない。仕事があるの！」

今でこそアトラやミリュード達はマシになつたが、男手がなければ生活が厳しいんだ。

それをほつぽつて滞在とかできるわけねえだろ！」

「一応何とかできるように進言してみるが……あまり期待しないでもらいたい。」

こちらのまくし立てるような言葉によつて、リーシャは困つたよう  
に考えてから申し訳なさそうに言葉を口にした。

確かに彼女は遣いのような者だろう。それなら彼女に言うのは御  
門違이다。

それを指示した主にこそ伝えるべき内容である。

「つたく、わあつたよ。リーシャを責めても仕方ない。お前らを寄越  
した主に直接俺が言うよ。」

「すまない。」

「お前らには悪いが、一応交渉決裂なら速攻で帰るのも頭に入れてお  
いてもらえたらしい。」

その答えにリーシャは納得したのか頷いて返事を返した。  
隣では不服そうにリリアンが態度で示していたが、譲れないものは  
譲れないのだ。

村へと戻った後は獲物をみんなに渡してからアトラへと実を届けた。

そのまますぐに着替え村を発った。

その甲斐あつてか、あくまで体感でしかないが王都には日が沈んでから割と早く到着できたと思う。

道中なんだかんだとモンスターにも出くわしたが、王都に近付くにつれてモンスターの動きも鈍くなつたように感じた。

いうなれば、弱くなつていつたという具合だ。

見たことがないモンスターばかりで最初は警戒していたが、リーシャだけじやなくリリアンでも簡単に倒していた。

それを見て考え付いた先は王都近辺のモンスターは弱いという事だ。

ならば一々馬から降りて戦つてもらうのが面倒くさくなつた。

彼女達は不明だが、こちらとしては時間が押しているのだ。

できれば早めに力タを付けて帰りたいという気持ちを優先させる。

その為、見つけたら走りながら殴る蹴ると行い、ほぼ一発で仕留めながら猪のように突き進んできたのだ。

おかげで無駄な時間が減り、こうして早目に到着ができたのは幸いだろう。

ちなみに王都はと、夜なだけあつてどういう景色なのかはあまり視認できない。

まあ、観光に来たわけではないしな。

特に気にする必要性も今は無いだろう。

そんな現状はと、今は街で買った水を飲みながら広場にあつた噴水の縁石に腰をおろしている。

さすが街と、景観は見えなくとも村とは違いそこかしこに街灯のような何かしらを利用した灯りが灯されていた。

「しかし、隼人は疲れていないのか？」

「リーシャ様。そんな体力バカの化け物なんて放つておけばいいので

す。

むしろバカと化け物を足してバカ者ですよ。  
本当、魔法も使えないのに人間辞めましたっていうような人を初めて私は見ました。」

「いや、しかし……」

リーシャが気を使つて声をかけてくれた。

多少眠氣こそあるが、特に疲れたような感覚はない。

それにしても呆れているのか相変わらずリリアンは口調こそ丁寧なのに中身が酷い。

もう少しリーシャみたいに心配する素振りでも見せてくれてもいいのではないかと考えてしまう。

逆に言えばこれがリリアンの素に近いものなんだろう。

「よし！リリアン。そこに君は一度座ろうか。これから付き合いについてよく話し合つておかなきやいけない事があるようだ。」

「いや！何で私があんたと話し合わないといけないのよ！」

「まあまあ……」

「ああ。リーシャは気にするな。体調については問題ない。」

「確かに想定以上に早く帰還できた事は嬉しいが、無理はするなよ？」

リリアンに軽口を叩いて冗談を言つたが、間髪いれずに即答で拒否されてしまった。

なんという自己が強い女の子なのだろうか。

言葉がきつい分、少し凹みそうになる。

それとは対照的にリーシャはとすると、腰を曲げながら人の顔色を覗き込むように伺つてくる姿に多少どきどきする。

例え鎧を着ていようとも言つて美人なのだ。

故意的な部分が無い分、そりや男なら誰でもドキッとするだろう。

ただし、若干無防備すぎる節がある。

これだと悪い男に引っ掛かるかもしねれない。

そう思つたところですぐにその考えを否定する。

あ、そういうリーシャはレベル43だつけか。

並の男共なら強引にいつたとしても物理的に強引に組み伏せられるという事だな。

そう考えると余計な心配だろう。

「リーシャ様！ それでは私は馬を厩舎へと連れて行きますので、リーシャ様はお、は、や、め、にご報告をお願いいたします。」

「あ、ああ。何を怒っているのかわからないが、そうする事にする。」リリアンが額に青筋を立てながら力強く催促するのが見てとれた。一体何がそこまで不機嫌なのだろう。

要するにリリアンはあれだな。リーシャと百合か。

好きな人を取られて拗ねている。つまりそういうことなのだろう。傍から見てホモは受け付けないが、百合はバツチコイというようなレベルだ。

それならば伝えておこう。

「フツ。リリアン。恋は茨の道というががんばれよ。

俺は影から応援しているぞ。主にビデオカメラを手に持つて。」

「お、お前！ 何を笑っている！ というより何かを誤解しているな！ 違うぞ！ 断じて私は違う！」

「そうか。違うのか。うん。違う違う。そういう事にしておこう。」

「リーシャ様。やはりこの体力バカは連行ではなく今ここで殺してしまいましょう！

むしろ私に今すぐ殺させてください！ 生きているだけで人に迷惑をかけます！」

言葉を知らない事を良い事に、リリアンの肩に手をかけながらこそとばかりにセクハラ的な事を遠まわしに言つてやる。

するとリリアンが肩を震わせ物騒な言葉を口にしたが、それは気持ちを隠しているのだろう。

というより、やっぱりからかうのが面白いなコイツは。「と、とりあえず落ち着け。リリアンも疲れただろうから馬を休ませたらお前も休め。

私もすぐに戻るから。」

「あははは。悪いなりリリアン。お前が可愛いから、ついからかいたく

なるんだ。

安心しろ。リーシャを取つて食うつもりはない。

俺も用事を済ませたらすぐに村に帰るつもりだ。」

「——つ!? ばかにするな！」

顔を赤くしながら文句を言つてきたりリアンだつたが、リーシャに促されるようにして馬を休ませに戻つていった。

リリアンが去つた事で後に残つた空氣はとても静かなものだつた。それはリーシャが落ち着いているのもあるからだろう。

「はあ……隼人にも程々にしてほしいものだ。」

あそこまでリリアンの感情を搔きぶるのはお前が初めてだ……」

心底呆れたという感じでリーシャは額に手をあてている。

あの手の女の子はこのようなやり取りで進める方がいつの間にか仲良くなっているのだ。

一応それなりに言葉や空氣は読んでいるつもりだ。

気にするような事では特にないだろう。

「そうか？まあ可愛いもんじやないか。」

「隼人はリリアンみたいな女がタイプなのか？」

リーシャの予想外な言葉に、口に含んでいた水が器官へと入つて噴き出してしまつた。

何故そういうなのだ？

「あつはつはつは。リリアンがタイプ？」

あれは完全にまだ子供だ。それも相当なじやじや馬な子供だ。

ムードに流れてつてのがあつたとしても、常時あの状態だと後輩の面倒を見るのと何ら変わらない。

タイプになるとしても、もう少し落ち着いて大人になつてからだな。」

「そうなのかな？ならどんな女性がタイプなんだ？」

んく特に真面目に考えた事がない。

好きになつた子がタイプになる人間だから、毎回付き合う女の子はタイプが違う。

ただ、性格がキツ目の方が長続きするのは確かにあつたな。

「あまり考えたことが無いが、リリアンとリーシャを比べるならばリーシャだな。

どうやら性格がキツイ女の子の方が、今までを振り返つて相性が良いみたいだ。」

予想外の返答にリーシャは固まっているように見えた。

まさか自分と比較されるとは思つてなかつたのだろう。

こういうのはその場にいない女の子を例えにするよりも、今日の前に居る女の子を比較対象にする方が良いと経験上思つている。

例えそれが悪い部分であつても、それを長所として捉えるように言葉を並べ替えればそんなに悪い気はしないだろう。

「それにな。初めて助けてくれた時を覚えているか？

あの時の姿も凜としていてかつこよかつた。正直ドキッとしたのは確かだ。

あとは俺がデートかと、からかつた時に切り返しに一瞬驚いて戸惑つていただろ？

そういうきちんとした女の子らしい一面も持つてゐる。

十分魅力的でタイプと言えばタイプに入るな。」

「そ、そ、うか。ある意味隼人は女の敵だな。」

「なんでだ？ 良いところは良いと素直に言葉にする事が大切だと思うぞ？」

「それに気付いていないのが、尚の事たちが悪い。」

「あつはつはつは。よく言われる。」

リーシャの指摘通り、元居た世界ではこんな調子で良く女の子達に女の敵と言われたのを思い出した。

特に中の良かつた女の子には「あなたの死因は女に背中から刺されて死ぬんだろうね。」と真顔で言われた事もあつた。

まあ、嫌がる女の子には無理に話しかけないし、普段から無理に口説こうという事もしていない。

あくまで平常運転の自然体で接しているだけにしか過ぎない。

時に修羅場なども何回か経験はしていたのも確かではあつたが、きちんと都度ケジメはつけてきたと思つてゐる。

というよりもちらばかり質問されていているような気がする。

これではつまらない男になつてもおかしくない事から適当に返す事を決める。

特に意味は無い只のコミュニケーションという奴だ。

「逆にリーシャのタイプはどんな男なんだ？」

立候補したい一人としてはきちんと聞いておかないといけないような気がするんだ。」

「全く馬鹿馬鹿しい。私のタイプは父のような立派な人物だ。

というより本当に身体は大丈夫なんだな？」

「あははは。流したな。まあそういう事にしといてやる。

ちなみに、さつきも言つたが体調は問題ない。」

杞憂だつたのか軽い掛け合いの後、普通に質問された。

コミュニケーションを取ろうとしていた自分としては些か肩透かしを食らつたが、堅苦しそうリーシャの事だ。大方仕事を優先していけるのだろう。

その為にきちんと答えた。嘘ではない。

確かにリーシャのしつこいくらいの心配もわかる。

この街に来るまで馬でリーシャ達は帰つてきたが、自身はと言われば走つて来た。

馬など村には無かつたからだ。

それを気遣つてリーシャが自分の馬の後ろに乗るように言つてきただが、なんというか若い女の子の腰に手を回すのに若干の抵抗感があり走る事を選んだ。

言葉では軽く言えても若くない今の自分としては、一応常識はあるのだ。

それにその時アトラが地味にやきもちのような表情を見せていたのもある。

アトラとは上手くやれていたし、面倒を見ててくれた恩人だ。

それならばあまり心配させたくはなかつた。

しかし、リーシャは到着が遅くなると言つて強引に乗せようとした。

ベリーウッドの森まではこちらのペースで走っていたので、遅いと思われていたのもあるだろう。

その為、とりあえず普通の人間よりは早く走れるのを説明してから、嘘かどうかを確認するために軽く馬に並走してみた。

その時のリーシャとリリアンの驚いた顔には満足したものだ。

それに対しても中リリアンがムキになつて馬の速度を上昇させ、ドヤ顔で先行するような場面もあつたが、リーシャにとりあえず付いていくからと速度を上げるように促して確認を取つた後、リリアンに負けじと神脚速移を発動した。

ハツキリいつてスキルの発動中はぶつちぎりで引き離した。

その時のリリアンの悔しそうな顔はしばらく忘れないだろう。

また、発動中はEPの効果もあつてか、殆どスタミナも減らなかつた。

走る→スキル→走る→スキルを繰り返した事で、普通よりも疲れる事がなかつた。

むしろこれだけ長距離を走つて疲れる事が無いというのがわかつただけ大きな収穫だ。

流石にEPが回復してもすぐにスキルを発動させたので、途中からはほぼEPは枯渇していたのは間違いないが。

「そうか。それなら私は報告に行くが、付いてきてくれるか？」

「ああ。わかつた。」

初心なのはやつぱり可愛いもんだな。

俺も純粹な頃に戻れるなら戻りたいぜ。

振り返り歩き始めたリーシャを追うように付いていく。

ふわりと風に流れ一瞬だけ髪から覗いた耳は、街灯に照らされ多少赤くなつていたのが見えた。

それを後ろから眺め、案内される場所は一体どんな場所なのだろうかとまだ見ぬ出来事に考えを巡らせた。



案内された場所。

それは学生時代の頃、学校に存在していた体育館くらいの広さのある広間だ。

恐らくお偉いさんが使うような場所なのか、入り口を入れると奥には階段が3段程あり、更にその奥に立派な椅子が二つ視界に入る。

遠目から見ても椅子の縁には金持ちが好みそうな金色の装飾が施されているような物だつた。

その片方、こちらから見て左側へ一人の男が座つてゐる。

いい歳した初老の男だ。

その周りには数人の兵士のような人間達が立つて居た。

多分この初老がこの國のお偉いさん。いわゆるトップの王という人間なのだろう。

周りにいるのは護衛兵だろうか。

向こうで言うところのSPみたいなものだと予想できる。

初老の人物はまるで絵にかいたような王とでも言うように、頭に王冠を乗せ肩に乗るような白髪交じりのウェーブがかかつた髪に髭を蓄えていた。

しかしながら、その顔付きは精悍で身体つきからしてまだまだ現役だと言う雰囲気を持つてゐる。

両手には宝石が埋め込まれた指輪をして、身に付けている物は赤い絹で出来てゐるのか、ローブのような物が部屋に灯された灯りによつて美しい光を反射してゐた。

歩いてきた道は幅相当広い幅だ。

どれくらいのか置を一列に並べた事などないことから、予測ができない。

そんな広さの幅の真ん中を中心にして2／3程を赤いカーペットみたいなものが敷かれている。

男の前でリーシヤが膝を折り、片足を地面に付くようにして頭を垂れた。

その姿は傳ぐという言葉が適切だろう。

しかし自分はといふと、頭を下げるつもりは毛頭ない。

いくらこの國のトップだとしても、自身にとつては何をしてくれた

わけでもないのだ。

むしろ迷惑を吹つかけて来た奴のトップかもしれない。

それに玉座であろうイスにふんぞり返るお偉いさんに媚び諂いなどストレスで頭がハゲてしまう。

「リーシャ・レオリウス。只今を持って帰還いたしました。」

リーシャが目の前の初老に対して報告をする。

言わなくても見てわかるだろうと内心思うが、それは必要な作法なのだとか会社の報連相を思い出していた。

初老はゆっくりとリーシャへと目を向ける。

「そうか。ご苦労であつた。そちらの男が言つていた人物か？」

「はい。レイス様へとご報告いたしました人物でございます。」

「うむ。」

なぜこうも絶対的な上役位置に居る人間は堅苦しいのか。  
もつとこう息を抜いてもらいたい。

それにリーシャがこうした言葉使いと態度を鑑みると、実際に偉いのだろう。

部外者である自身が口を挟むような事は特にするつもりはない。  
初老がリーシャから視線を外すようにして続けてこちらへと目を向ける。

まるで值踏みされているような視線にイライラが募る。

「おい。おっさん。お前が偉いのは見てわかる。リーシャが頭を下げて  
いるからな。

ただ、俺からすると関係ない。

人を呼んでおいて値踏みするような見方をするな。気分が悪い。」

「貴様つ！ 国王様に向かつて何という口の利き方をする！」

周囲に立っていた兵士達がざわめき立ち、敵意を持った声を上げながら武器を構えた。

「なあ。いい加減してくれねえかな。人は合わせ鏡と言わねえか？

これがそこに座つてテメエの答えなら意地でもコイツらブチのめして家に帰るが？」

「隼人！ 落ち着け！」

リーシャが宥めてくるが無視だ。

別に無理して敵対したいわけでもないが、初対面でこの応対なら普通の日本人だと誰でもキレるだろう。

自分としてはこちらの常識や縦割り社会に興味が無いし、知るつもりもないのだ。

「悪いなリーシャ。お前の気持ちも汲んでやりたいが、こいつらが敵対するなら全員に後悔させるだけだ。お前に言つたろ？」

人と比較するぐらいならモンスターと比較した方が俺の強さはわかりやすいって。

それを見せてやるだけだ。」

「隼人！」

「はっはっは。お前ら武器を收めよ！」

初老の中年は手を薙ぐようにして兵士達を静止させる。

その声に対してもう一つ問題がある。兵士達の顔だが、やはりトップなのだろう。

何も言わずに渋々ながらも武器を收める。

「いや、すまん。敵対するつもりは無い。言葉を理解できぬと聞いていたものでな。」

それでどのような者かと少し見ていた。実際は話せるのだな？」

初老の言葉は流石というかなんというか、貫禄というもののだろう。流石はこの国の王というだけの事はある。

「ああ。村のみんなのおかげで、文字の読み書きこそ無理だが、会話なら殆ど問題ない。」

「そうか。では改めて自己紹介をしよう。」

私はこの国、フォルゲンの王。ギリアム・マトリカだ。」

「俺の名前は如月隼人だ。」

向こうが謝罪して自己紹介をしたならば、こちらもそれ相応には応対する。

不満はあるが、相手が悪いからと言つて相手よりつまらない人間にはなるつもりは無い。

互いに短い自己紹介を終え、少しの沈黙が流れる。

隣ではリーシャがホツとしているのか、目の前の王には聞こえない程度の安堵の溜め息を吐いているのが聞こえた。

「それにしてもこのような少年がスカイタイガーの攻撃を凌いでいたというのはな。」

「陛下。失礼ながら発言の許可を頂きたく思います。」

「なんだ？」

「過去にスカイタイガーの攻撃を退けたのは事実ですが、今では適正なレベルこそ足りていませんが、予想だと一人で討伐が可能だと思われます。」

「ほう？ それは何故だ？」

面白いものを聞いたという感じでギリアムがリーシャへと言葉を促した。

しかしスカイタイガーと言つていたが何だ？

一応タイガーと言うからには虎と思うが、あの虎を指しているのか？

頭の中でこちらの言葉を向こうの言葉に変換して理解しているから虎をイメージしたが、

タイガーと言つても別のものを指すものかもしれない。

もしかして俺に何かを討伐させるつもりなのだろうか。

勇者の冊子では勇者とは実の所、実入りのいいハンターだと書かれていた。

「本日、彼の仕事であるモンスターの討伐に同行したのですが、

その際ファオレストウルフの群れへと遭遇しました。

その数、9匹。当初の実力を想定していた自分としましては、とても勝てるような状況でないと判断して撤退を進言したのですが、彼は予想を裏切り素手によつてほぼ無傷で8体を仕留めております。「ふむ。お主が言うなら間違いないのだろう。

しかし、ほぼ無傷。という事は何かしらのトラブルで9体居たファオレストウルフを8体しか仕留めきれず、残りの1体をお前が片付けたのだな？」

「いえ、それは、同行していたリリアン・ホリアムが、何といいますか

なぜそこで言い淀む。

ズバつと言つてしまえばいいのだ。

下手に言い淀むとやましい事があるのかと思われてしまう。

そう考えここに来て言いにくそうなりーシャに対して割つて入ることにした。

「簡単だ。リリアン達を守る為に俺がフォレストウルフに足を噉まれただけだ。

別にそれだけなら追いかけて簡単に仕留めたんだが、リリアンが腰を抜かして服を掴んでいたから動けなかつたというのが答えた。「にわかに信じがたい話だがリーシャの手前、疑うのは無粋というものだな。

フォレストウルフは1匹討伐するにしても並の兵士なら数人は必要だ。

しかし、リリアンと言つたか、もう少し鍛えるべきだな。」

あの狼が並の兵士なら数人？

冗談も休み休み言え。

確かに地の利や工夫、そして数人は必要かもしれないが、親父が指示すれば兵士よりもレベルが低い村人数人でさえ倒せる。

どれだけここの指揮官は兵士を使うのが下手くそなんだ。

逆に言えばそれだけ親父が優秀だと言う証明もあるのだが。

しかし――

「おい、おっさん。リリアンを悪く言うのはやめろ。

人は失敗して成長するんだ。そんな事もわからんねえのか？

それにあいつは女の子だろ。更に言えば聞いた所によるとあいつは初めての任務だつたそうじやないか。

そんな人間が、しかもお前らの話だと1匹に対して数人必要なモンスター、その2匹に同時に襲われたんだ。逆の立場になつて考えてみろ。

死にかけたと言つても間違いない。普通なら男でもビビるだろうが。

それにな、周りからあーだこーだ言うのは簡単だ。現場で同じ体験をしてから物を言え。」

「ふははは。青二才の子供の癖に、このワシに対してもそのズバズバした物言い。逆に気持ちが良いな。」

言いたい事を伝えた上で豪快に笑うギリアム。

その姿は外見こそどこぞのテンプレ王だが、話してみると中身はまるで土方の親方のような感じがする。

ただ、そうは言つても一つ訂正しておくことがあった。  
誤解は招きたくない。

「おい、おっさん。確かに俺はおっさんからすると青二才だ。

ただ、一つ訂正してもらおう。俺は子供じゃない。アラサー男子だ。」

「アラサー男子？それは特殊な称号か何かか？」

笑っていた顔から急に真面目な顔になつてギリアムは聞いて来た。リーシャも同じように相変わらず頭にクエスチョンマークを浮かべたような表情で膝を付きながらこちらを見上げている。

「確かにアラサー男子は称号つて言えば一時の称号だろうな。

ただ、厳密に言えば称号じゃない。年齢だ。」

「ふむ。それで？アラサー男子とは何歳を示すのだ？」

「アラサー男子はだいたいの年齢を示すだけだ。俺の年齢は三十歳だ。」

しばしの沈黙が続いたあと、リーシャが城に響き渡るような大声で叫んだのは割愛しておこう。

「そうかそうか。お主、いや、隼人は三十歳か。

しかし誰がどう見てもリーシャ、むしろ娘のレイスと同じくらいの年齢にしか見えんぞ？」

リーシャやギリアムの周りの兵士はそうだそだと言わんばかりに頷いている。

いや、お前らもつとビシツとしろよ。

確かアニメや漫画だと王の周りの兵士達つてもつとこう。ピリつとした空気を持つていたら。

そんなツツコミを内心入れながらも冷静になつて考える。

そういえば今までこつちの世界に来て鏡のような物を見たことがない。

自分の顔を詳しく見る機会が無かつたのは確かだ。

流れる水で確認を行おうにも、水面が揺れており確認ができるはずがない。

「なあおっさん。」

「隼人殿、さすがに王に対してその口の利き方はなんとかできないか？」

「リーシャ。よい。隼人とはこの方が何というかワシも新鮮で話やすいのだ。」

「だそうだ。リーシャ。諦めてくれ。俺も今更ギリアム王つて舌を噛んでしまいそうだ。」

まあ流石にリーシャの言うようにおっさんだと混同しそうだから、親しみを込めてギっさんと妥協しよう。」

「ふははは。面白いではないか。」

「あと、年齢を聞いたからだろうが、殿はやめろ。殿は。隼人でいい。距離感があつて寂しいだろうが。」

流石に王に対して言葉使いが不味いと思つたのだろうか、言い改めるようにリーシャは促すが、そんな事は知つたこつちやない。

それにギっさんも悪いようには捉えていないのだ。

その態度を見て諦めたように膝を付いたままリーシャは肩を落とした。

「でだ、ギっさん。こつちに鏡みたいな物はあるか？

自身の姿を確認できるような物と言えばわかりやすいか？

俺はこつちに来てから自身の姿を碌に確認した事がないんだ。

いい機会だから確認してみたい。」

「ああ。あるぞ。おい。そこの奴。ワシの部屋から取つてこい。」

完全にこのおっさんもリリアン同様さつきまでとキヤラが違うよな。

あつちは演技だつたのか？

まあ自分としてもこっちの方がやりやすいが。

指示された兵士は敬礼をした後、踵を返して広間から消えていった。

「して、隼人。」

ギツさんが手を組んで眼光鋭く話しかけてきた。

先程までの笑っていた表情とはまた真逆の真剣な表情だ。

こうも切り替えが早いと、流石にどちらが本当の人間なのかと疑いたくなつてくる。

「なんだ？」

「隼人は自分が召喚されたと認識しているようだが、間違いないか？」「ああ。それであつて。過去の勇者の書いた冊子を読んで理解している。」

「そうか。その冊子というのがわからないが、理解しているのか。ならば話は早い。すまないな。」

「なんで謝る？ギツん達が召喚したんだろ？」

てつくり予想ではギツん達が召喚した物だと思い、我らに従えや、冊子に書いていたようにモンスターを倒せと命令するものだと思つていた。

その矢先、謝罪の言葉が出てきた為に多少想定外だつたことで困惑する。

「いや、ワシらは本来召喚する気が無かつた。」

「ワシらは？どういう事だ？」

ギツさんが言うには、文献には残つているがどうやら次元の狭間とやらはここ500年程存在を確認していないらしい。

しかし、最近モンスターの異常行動による被害の発生が世界的に多発している事によつて、それが文献に残された次元の狭間に関係あるんじやないかと危惧する者がいた。

それが臣下の中の一人である大臣だ。

大臣の言い分的にはこのままでフオルゲンはモンスターによつて滅ぶと考え、

それならば遅くなつて取り返しがつかない状態になる前に、文献に

ある勇者を召喚してモンスターからも守つてもらおうと画策したそ  
うだ。

そして独断専行で勇者の遺物を使つて儀式を行つたというのが流れ  
るようである。

完全にギッさん達にとつても予想外の出来事だつたらしい。

途中、勇者の遺物というのが理解できずに質問したが、いわゆる装  
備や所持品だそうだ。

そして儀式の結果、儀式場に勇者は現れなかつた。

しかし儀式場では何か不安定な力が働いているという。

解決の為に原因調査隊が組まれたが勇者の遺物は喪失してしまい、  
その力が何なのか不明な為に念のため監視を付け立ち入りができるな  
いようにしているらしい。

過去の文献からしてすぐに召喚が成功するとは書いていなかつた  
ためだ。

もし儀式を行つてしばらく経過してから召喚されるならば、余計な  
手を加えない方がいいだろうという判断だつたみたいだ。

そして勇者召喚の儀式は成功したのか、それとも失敗したのかも不明  
なまま時間だけが過ぎた。

しかし、儀式からしばらくして王国領内でスカイタイガー。

つまりあの白い虎で間違いないようで、それを討伐していく際に言  
葉が通じない人物と遭遇した部下が居ると娘であるレイス王女から  
報告が入つたらしい。

調査隊からの報告によれば、文献の中で言葉が通じない者もいると  
記録されている事から、もしやと思い、言葉が通じない者と接触した  
リーシャが矢面に立たされてリットン村へ派兵されたのだ。

それが俺だつたという流れである。

そして、もし勇者であるならば会つて謝罪したいということがギッ  
さんの話した大まかな内容だ。

「なるほど。ギッさんらの話は理解した。で、一ついいか？」

「なんだ？」

「その大臣はどこにいる？」

「今は勇者儀式を勝手に行つたとして投獄してあるが何か問題でも？」

説明を終えたギツさんに対しても大臣の居場所を聞く。すると更に眼光鋭く疑問を投げかけて来た。

こちらとしても理由は簡単だ。  
俺の事情も考えずに強制的にこちらに呼ばれた怒りを向けるだけだ。

一言で言うなら自分の都合でこちらの許可無く強制的に連れて来られたのだ。

ならこの手でぶちのめす！これだ。

「ギツさんは悪いが、大臣をここに今すぐ連れてきてくれ。

ギツさんらには関係ない。俺と大臣の問題だ。」

「それは、今の隼人に合わせるには断らざるを得ないな。」

こつちの世界の事情なんてどうでもいい。

難しい話など鼻から頭にはない。

しかし、ギツさんはこちらの気持ちを見抜いたのか、拒否の言葉を並べる。

下の者を守る。上に立つ者としては当たり前の行動だろう。

予想はしていたがこうなると厳しい。

「はあ……ギツさん、悪いが、こつちの事情は俺にとつては正直どうでもいい。

この国が滅ぶなら勝手に滅びろとさえ思う。」

「…………」

「そいつの都合で俺の人生は大幅に狂わされたんだ。

一度だけじゃなく既にこの世界で一度死にかけた。いや、フオレストルフを含めると三度か。

まあ、どっちでもいい。

ただな、元の世界ならまだやり直しがきくだろう。  
先に聞く。俺は元の世界に帰れるのか？」

「…………」

「無言と言ふ事はできない。又は不明つてことだらうな。

で、補足しておくと今では別にこの世界の事は嫌いじゃねえ。

ただ、ケジメはつけるべきじゃねえのか？」

「すまない……隼人の怒りももつともだ。」

ギツさんが目を閉じて、短いながらも重く深く謝罪の言葉を述べた。

しかし、投獄したからと言つて済むような問題ではないのだ。

勇者の冊子には帰つたとは明記されていなかつたし、帰る日程なども記述されていなかつた。

それに最後は嫁とあつたのだ。なら帰れていない可能性の方が高いのだろう。

それに、投獄したからといつてそれは都合が良すぎる。

元居た世界の日本でもそうだ。

法があつて裁判所で裁かれる。それは頭では理解できる。

しかし被害者側はどうだ？

当事者同士で合意の上でなら納得が行く。

それが自分の関係ない所で話が勝手に進み、勝手に処分が決まる。被害者の気持ちなんて全く考えられていない。

なら被害者側の気持ちはどうなるというのだ。

「むしろ、聞きたい。

テメエら謝つて済む問題だと思つてんのか？  
殺すぞボケが！」

「貴様っ！」

ギツさんの周囲に立っていた若い兵士の一人がこちらの言葉に対して我慢の限界に達したのか、手に持つた槍を構えて向かってくる。直進的に槍を構えて向かってくる姿はビーグと被るが、ビーグよりも動きは早い。

恐らくレベルの差という奴だろう。

しかし、ただそれだけであつて相手にもならない。

腹を狙つて突き出してきた刃先を左足を引いて軸をズレして避け、そのまま柄部分を左手で掴んで動きを止める。

「くつー放せー！」

「何でテメエがキレイなんだ？ああっ！？」

今は俺とコイツが喋つてんだろうが！！

それには、キレイいいのはテメエらじやねえ！俺だけだ！」

必死に振りほどこうと踏ん張つて槍を掲んでいた兵士。

握っていた柄を難なく引き寄せ、相手の体がバランスを崩して寄つたところで、その腹部へと加減した右拳を打ち放つ。

スキルを使用してぶつ飛ばすなど、フォレストウルフを数人で相手をするような奴らだ。

死んでしまう可能性がある。

それでなくとも全力で顔を握ればフォレストウルフのように脳漿をぶちまけさせる事も可能だろう。

言葉は荒くケンカこそそれ、実際の所人殺しにはなりたくない。一方殴られた兵士は金属で出来上がつていた腹部は凹み、苦しそうに悶絶して地面を転がる。

その腹を上から全力で踏みつけるようにして、地面へと打ち付ける。

兵士は苦しそうに悶えて最後は口から血を吐き、意識を失つたのかすぐに動かなくなつた。

「スキルも何も使つてねえから死んでないはずだ。

ただ、邪魔するなら次からは加減はしねえ。

死にたいなら前に出ろ。殺してやる。」

怒つているのは事実だが実際には殺さない。

意識を失つた兵士を踏みつけながら脅すだけだ。

脅しというのは時と場所によつて適切に使い分ける必要がある。

それに実際のところ、加減はしているしこれくらいの相手なら簡単に殺そうと思えば殺せそうだ。

そしてこちらの怒りに火をつけたと理解したのか、それともギツさんの指示がないからかは不明だが、他の兵士達は武器を構えるだけで近寄つては来ない。

それだけでも話がしやすい。

「ギツさん。この説明を受け、俺がどう出るかも考えなかつたのか？」

お前らは暗に俺に対してこの世界で死ねと突き付けたようなもんだぞ。

その上で謝りたいから連れてこい？

凶々しいにも程があんだけ。

普通なら下がミスしたら上であるテメエが脚を運んで謝りにくるべきだろうが！」

「もつともだ……」

責められる事を覚悟していたかのように、ギツさんは言い訳もせず再度頭を下げる。

「それにな、文献つてのが残つていて勇者の力を理解しているなら、勇者が敵に回る可能性すら考慮してなかつたのか？」

それを大臣一人で許してやるんだ。妥協しろ。」

「無理だ。いくら罪人だと言つても、これから行おうとしている隼人の行動の為に差し出す事はできない。」

毅然とした言葉で拒否を示すギツさんに対し、やはりかと思う。ただ、これは元の世界では下を庇うという事は上がケジメを取るという事だ。

そこに理由があるのは、下の面倒は上が見るのが当たり前だからというぐらいだろう。

大臣の責任を自分が取るという意味をこちらの世界のギツさんが理解しているのかは不明だが、軽くボコボコにぶつ飛ばしてやろうと歩き出した所で右肩を掴まれた。

「隼人！ 大臣がした事に対しても前が怒っているのはわかる。非礼は詫びる。」

どうやらリーシャが立ち上がり肩に手をかけて静止をかけてきたようだが、既にこちらは頭に血が上っている。

それにリーシャがいくら詫びた所で、リーシャは関係ない。

関係があるのは大臣と、その親である王だ。

「リーシャ、非礼は詫びるつつたな。

お前は知らないどこかの誰かによつて、俺達が生きる為に牢獄の中で寿命が尽きて死ねと宣告され、それから逃れられない立場になつた

らどう思う？許せるか？」

「それは……」

「お前らは俺にそれを無理やり押し付けたんだと理解しろ。」

「——っ！」

一瞬手から伝わる硬直。

多分リーシャはどう言葉を投げかけていいのかすぐに思い浮かばなかつたのだろう。

別に問い合わせようという気持ちで言つたわけじゃない。

ただ、事実を述べただけだ。

「わかつたら放せ。お前は関係ない。ギツさんをぶつ飛ばす。」

「無理だ……」

「なんだつて？」

小さな声で拒否の言葉を示したリーシャ。

ギリギリと強まる手の力に彼女なりの葛藤があるのかもしれない。「隼人がいくら大臣の犠牲になつて召喚されたと言つても、陛下の危機を黙つて見ているような立場でもないんだ。わかつてくれ。」「ギツさんの横にいるボンクラ共と違つて、覚悟は大したものだ。

ただな、勝てると思つてゐるのか？」

「どうやら加減できる相手でもなさそうだ。

それでもやるというのならば全力でやらせてもらう。」

リーシャは村に来た時同様、吹つ切れたように退く気はないと力強い言葉でハッキリ意志表示を示した。

それは俺からすると関係無い立場であつても、リーシャからすると王に仕える騎士だ。

彼女には理由がある。

一体どれだけ忠誠心が高いのだろうかこの女は。

「リーシャ。森での出来事や、ここまでの中を見て勘違いしているようだから言わせてもらう。あれは加減しての実地訓練だ。

俺が全力でやればお前を瞬殺するのは多分簡単だと思うが、それで放さないつもりか？」

「…………」

使わないと決めている鬼神進軍だが、EPが切れていない状態で言葉通りを行えば確かに瞬殺は可能だろう。

それに超感覚もある。気配から察してどう動くかも気合いを入れればわかるだろう。

しかしEPは切れている事から、ぶつちやけ脅しているだけに過ぎない。

それでも、無言で返す彼女の肩にかかる手からは力は失われず、退く意思を感じられなかつた。

「はあ～……まつたく……クソ眞面目というか何というか。お前は頑固だよ。」

「隼人……」

リーシャの揺るがない決意によつて毒氣を抜けられ、やる気が削がれてしまつた。

その為、彼女の肩にかける手から多少力が抜けたようにも思える。それにリーシャには関係ない上に、女に手を上げるのは男として見れたものじやない。

そんな第三者が殴られるのを覚悟で止めに入るのだ。仕方ないだろう。

「ま、仕方ない。これは貸しな。この貸しは今度俺とデートしろ。それでチヤラだ。」

「なつ!? お前はこんな所で何を言つているんだ!?!」

「それで許してやるつて言つてんだ。」

こつちは家族にも会えず、友人にも会えず、この世界で死ぬのが確定している人間なんだ。

それをデート一つで済むなら安いもんだろ？ 納得しろ。」

「むう～……しかし……そう言われてしまえば何か卑怯な氣もするが……これは仕方ない、のか？」

「そうだ、俺が召喚されたのも仕方ない。」

お前が俺を止めないといけないのも仕事柄仕方ない。

なら、俺はお前みないな美人と出会えた事をプラスに捉えようと思う。

そう考えたほうが腐つてゐるよりもんぢろ?」

「そうか。そういうものか。しかし、フフツ。隼人も物好きなものだな。」

「ははは。初めて笑つたな。」

緊張した空氣をぶち壊すために言つた言葉。

背後から驚きの声をあげたりーシャだつたが、わざとらしく濁した言葉に対し最後は察した様子で肩から手を放した。

まあ、この場を紛らわせる為の言葉のあやなだけであつて、別に本当にデートをしたいわけじやないんだけどな。

「というわけだ。ギツさん。

この件はあんたの顔じやない。ここまでしたリーシャの顔に免じて許してやる。

ただ、次にギツさんは問題を持つて来たら俺は許さない。

次は確実に敵に回る。それとこれとは別だつて事を覚えておけよ。」

「ああ。わかつた。本当にすまない。」

ギツさんは重く受け止めたようにして謝罪の言葉を述べた。

なんかギツさん謝つてばかりだな。

あ!――

「そうそ、この勇氣ある向かつてきたバカの手当てをついでによろしく。このまま死んだんじやリーシャが危険を顧みずに止めた意味がなくなる。」

「感謝する。」

ギツさんは短い感謝の言葉を発して近くの兵士達へと倒れている兵士の治療を指示した。

まあ、ギツさんも巻き込まれたようなもので、根はいい奴なんぢろうしな。

「隼人。今日はゆつくり休むといい。

明日にでもシャールと一緒にお前の今後について話し合いたい。」

「ありがたい申し出なんだが、それは断らせてもらう。」

俺は明日も仕事なんだ。だから今からでも帰るつもりだ。」

ギツさんが何かをしてくれようとしているのは理解できるが、ハツキリとした言葉で辞退させてもらつた。

それにもう終わつた問題だ。早く帰つて村の奴らを安心させたい。  
「そ、うか……もし何かあればまた来てくれたらいい。その時はできるだけの事はしよう。」

「ああ。覚えておく。んじやな。」